



日本統計学会 会報 2026.07.31 No. 208

発行——一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
公益財団法人 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任——青嶋 誠(理事長) / 明石 郁哉(庶務理事)
朝日 弓未(広報理事) / 田島 友祐(広報委員)
趙 宇(広報委員)
振替口座—00110-3-743886
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

- | | |
|--|--|
| 1. 巻頭随筆：統計エキスパート人材育成2.0と AI
.....水田正弘... 1 | 9. 第40回日本統計学会小川研究奨励賞について
.....狩野 裕...13 |
| 2. 第20回日本統計学会春季集会の報告
.....青嶋 誠・寺田吉壺・狩野 裕... 3 | 10. 第8回細谷賞授賞について
.....細谷賞選考委員会...14 |
| 3. 第31回日本統計学会賞について.....狩野 裕... 7 | 11. 2025年7～12月統計検定 CBT 方式試験の
成績優秀者.....狩野 裕・青嶋 誠...15 |
| 4. 第6回日本統計学会中村隆英賞について
.....狩野 裕... 8 | 12. 統計検定合格者の声.....狩野 裕・青嶋 誠...17 |
| 5. 第22回日本統計学会統計活動賞について
.....狩野 裕...10 | 13. 理事会・委員会報告（2026年05月09日開催）...20 |
| 6. 第22回日本統計学会統計教育賞について
.....狩野 裕...10 | 14. 社員総会報告（2026年05月30日開催）.....22 |
| 7. 第20回日本統計学会研究業績賞について
.....狩野 裕...11 | 15. 博士論文・修士論文の紹介.....28 |
| 8. 第19回日本統計学会出版賞について | 16. 新刊紹介.....31 |
| | 17. 学会事務局から.....31 |
| | 18. 投稿のお願い.....32 |

1. 統計エキスパート人材育成2.0と AI

水田 正弘（統計数理研究所）

巻頭随筆の冒頭で、一つお知らせを申し上げます。2026年7月3日に、統計学教員を育成する研修事業である「高度統計人材育成強化拠点形成事業～AI・データ駆動型研究を牽引する統計エキスパート人材の育成～」の採択通知が届きました。本事業は、他の分野を専門とする若手研究者に対する1年研修（10月から翌年9月）が基本です。この期間中で、統計学の基本的・発展的な考え方を理解するとともに、統計学の講義の設計と実施を担当できる能力を得ることを目指しております。さらに、希望者には1年間のフォローアップ研修に参加することができます。研修に必要な経費は、プロジェクト費で負担します。

メンターは、統計学会をはじめ多くの学会での中心的活動実績、多様な分野で実績のある研究者がそろっています（赤穂昭太郎先生、岩崎学先生、越智義道先生、折笠秀樹先生、国友直人先生、栗木哲先生、佐藤俊哉先生、清水邦夫先生、神保雅一先生、水田正弘、三輪哲久先生（五十音順）2026年7月現在）。

第1期研修生の募集を実施しています。お近くの若手研究者にお声掛けいただけると幸いです。本会報が出た時点では、本年度の締め切りまでの時間が短いかもしれませんが、来年度以降も募集します。統計エキスパート人材育成コンソーシアムおよび「統計学教員育成研修」研修生募集の

ページをご覧ください^{1, 2}。

これは、「統計エキスパート人材育成プロジェクト（2021年度－2025年度）³」の後継プロジェクトです。前身事業も統計数理研究所が中核機関となり、全国の多くの大学の連携により実施されました。38名の大学教員が研修を修了されました。現在、11名の大学教員が2027年3月の修了に向けて研修中です。研修を修了した先生方は、それぞれ、本務校で、統計学の講義や、カリキュラム設計、管理運営を担当されています。さらに、統計学を使った各自の専門分野の研究成果を多数発表されています。昇進された方も多数います。文部科学省中間評価では、最高位である「S」を取得いたしました。毎年、統計関連学会連合大会の企画セッションで事業の成果をご報告しております。今年も企画セッションが認められましたので、ご興味のある方はお立ち寄りいただければ幸いです。

このような統計教員育成事業を構想するうえで、関係者で繰り返し議論したのは、「AI時代に統計学を学ぶ意味とは何か」という問いでした。私の専門である統計学の重要性は、私自身にとっては自明であり、深く問い直す機会はありませんでした。しかし、近年のあまりにも大きな変革である第4次AIブームは、統計学の存在意義と今後を考える大きな背景になりました。多くの先生方との情報交換や議論により得られた、現時点での私の理解を以下に書きます。

統計学の有用性を示す代表的な言葉は、「統計学は科学の文法である」という、19世紀の著名な統計学者カール・ピアソン（Karl Pearson）が提唱した概念です。AI時代における統計学の役割を考えるうえでも、この言葉は示唆に富んでいます。

「これだけAIが進んだので、〇〇は不要である」との発言は、よく聞かれます。「AI時代には統計学なんか不要である」という、一見もっともらしく聞こえる主張に反論できますか？

ナイチンゲールも加盟していた歴史ある統計関係の学会 Royal Statistical Society から、本年、AI

is Statistics: Why statistical thinking is vital for the effective, ethical and safe use of AI「AIは統計学である：AIの効果的、倫理的、安全な利用のために統計的思考が不可欠な理由」という記事が出ました⁴。多くの観点から議論されていますが、本質は、「AIは統計的なパターン認識を基盤として構築されている」という点です。

米国統計学会（American Statistical Association）が、Strategic Plan for AIを作成中であることを佐藤俊哉先生から教えていただきました⁵。「統計学の専門知識なしに、責任を持ってAIを開発・展開することは不可能である」との立場のようです。

AI時代における統計学の役割は、(1)AIシステムの設計、(2)LLM（大規模言語モデル）やSLM（小規模言語モデル）の学習データ選別、(3)利用時における問題設定・倫理観・説明可能性・結果の解釈など、多数あると理解できます。

前身事業では、若い研究者である研修生が積極的にAIを利用した研究を紹介してくれました。例えば、深層学習による画像分割手法を活用した眼底写真における動静脈交叉現象の自動検出は特許申請がなされました。後継プロジェクトでも、AI活用は重要な観点です。AIの進展はあまりにも急速です。統計学は、現代AIの重要な理論的基盤であり、AIを発展させるとともに、適切なデータの収集から、AIが出した出力の正しい利用法に寄与できると考えています。

少し遊び心をもって、LLMにも「AI時代に統計学は不要ではないか」と問いかけてみました。さまざまなプロンプトで試みましたが、不要であるとの回答は得られませんでした。あるLLMは、「AI時代に消えるのは統計学ではなく、統計学を知らずにAIを盲信する人のほう」と述べました。やや刺激的な表現ではありますが、AI時代だからこそ統計学的思考が重要であるという点では、多くの専門家の見解とも一致しています。後継プロジェクトが、AI時代に求められる統計学人材の育成に寄与できると信じています。

¹ <https://stat-expert.ism.ac.jp/>

² <https://stat-expert.ism.ac.jp/newproject/>

³ 中西寛子 (2025) こちら統計エキスパート人材育成コンソーシアム研修部, 日本統計学会会報 No.202 2025.1.31

⁴ <https://rss.org.uk/news-publication/news-publications/2026/general-news/ai-is-statistical-that-matters/>

⁵ <https://asa-ai-strategy.netlify.app/>

2. 第20回日本統計学会春季集会の報告

青嶋 誠 (日本統計学会理事長)

寺田 吉壺 (企画・行事委員長)

狩野 裕 (実行委員長)

第20回日本統計学会春季集会が2026年3月7日(土)に同志社大学今出川キャンパス良心館(京都府京都市)を会場に、一部の講演を除き、遠隔でのリアルタイム参加も可能な形で開催されました。招待講演による4つの企画セッションと1つの特別講演はハイブリッド方式で、ポスターセッションは対面方式のみでそれぞれ実施しました。

午前は、RY103教室で開会式開催の後、2つの会場に分かれ、2セッションが並行して実施されました。RY103教室では韓国・台湾からのご講演者を含む国際セッション「Time series, Markov models, Change points, Copula, and Threshold Regression (オーガナイザー: 江村剛志氏(広島大学))」, RY104教室では「文化とデータサイエンス (オーガナイザー: 谷岡健資氏, 宿久洋氏(同志社大学), 寺田吉壺(大阪大学))」がそれぞれ実施されました。

昼休みをはさみ、午後はポスターセッションからはじまりました。良心館1階ラウンジ横を会場に、コアタイムを第1部、第2部に分けて開催され、大学院生や若手研究者を中心に過去最多となる計62件の発表が行われました。

ポスターセッション後、RY103教室、RY104教室の2つの会場で2セッションが並行して実施されました。RY103教室では「情報幾何の広がり(オーガナイザー: 松田孟留氏(東京大学・理化学研究所))」, RY104教室では「計算が切り拓く統計科学 (オーガナイザー: 奥野彰文氏(統計数理研究所))」がそれぞれ実施されました。

午後の最後のセッションとして、狩野裕会長に座長をお務めいただき、甘利俊一氏(帝京大学特任教授, 理化学研究所荣誉研究員)による「統計学と情報幾何」と題する特別講演(オンライン)が、RY地1教室で行われました。

最後に、ポスターセッション表彰式と閉会式が行われました。優れたポスター発表に贈られる優秀発表賞は、任昶俊氏(ソウル大学), 海野哲也氏(筑波大学), 川戸健太竜氏(東京大学), 塩谷天章氏(東京大学), 鈴木俊太郎氏(大阪大学), 宮崎隆之介氏(一橋大学)の6名に、学生優秀発表賞は、石嶺隼氏(筑波大学), 葛本大志氏(東京大学), 福士歩氏(東京大学), 前田煌氏(東京大学)の4名に授与され、狩野裕会長より表彰されました。また、照井伸彦氏(一般財団法人統計質保証推進協会 統計検定センター長)より、優秀発表賞と学生優秀発表賞の受賞者に対して統計検定センター長賞が贈呈されることが告知されました(賞状・副賞は統計検定センターから後日送付されます)。

今年の春季集会の参加登録者は、現地参加192名, オンライン参加登録63名の計255名でした。今回の春季集会も多くの方の発表者と参加者に恵まれ、盛会のうちに終了いたしました。本集会を成功裏に終えることができましたのは、開催校である同志社大学の関係者の方々をはじめ、所掌外の業務にもご協力いただいた学会理事・委員の皆様、ならびに急な依頼にもかかわらずポスターセッションの審査をお引き受けいただいた会員の

皆様のおかげです。末筆ながら、ここに記して深く感謝申し上げます。

春季集会 URL : <https://jss2026spring.ywstat.jp/>

ポスターセッション優秀発表賞 受賞のことば

任 飛俊 (ソウル大学)

この度は、優秀発表賞および統計検定センター長賞にご選出いただき、誠に光栄に存じます。日本統計学会の理事長、会長、実行委員会の皆様をはじめ、本集会の運営に尽力されたすべての方々、そしてご審査いただいた先生方に心より感謝申し上げます。また、PhDの指導教員として導いてくださった Byeong U. Park 先生 (ソウル大学)、現在ポスドクとしてご指導いただいている Sungkyu Jung 先生 (ソウル大学)、そして共著者の Jeong Min Jeon 先生 (ソウル大学) に、この場を借りて深く感謝の意を表します。皆様の温かいご指導と支えがあったからこそ、このような栄誉に預かることができました。

本発表では、トラス型説明変数を用いた「局所フレシェ回帰 (Local Fréchet Regression)」について、世界で初めての包括的な枠組みを提案いたしました。理論面では、提案した推定量の収束速度がミニマックス最適であることを数学的に証明し、実用面ではネットワークデータ等の複雑な実データへの適用可能性を示しました。

今回の学会は、日本の多くの優れた統計学者の方々と直接交流できる大変貴重な機会となりました。特に、会場での質疑応答を通じていただいた鋭いご指摘は、私の研究をより深めるための貴重な示唆となり、多くの学びを得ることができました。こうした経験と今回の受賞を大きな糧とし、今後も同分野の研究に一層邁進するとともに、統計学の発展に貢献できるよう精進してまいります。

海野 哲也 (筑波大学)

この度は優秀発表賞という栄誉ある賞に選出し

ていただき、誠にありがとうございます。審査委員の皆様をはじめ、ポスターセッションの企画・運営に携わった大会関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。また、日頃から熱心にご指導くださる青嶋誠先生、矢田和善先生、そして発表練習にお付き合いいただいた青嶋研究室の皆様にも、心より感謝いたします。

本発表では、高次元平均ベクトルの線形結合からなるベクトルの推定問題に対し、「自動スパース推定」と呼ばれる新たな方法論を用いたアプローチを提案すると共に、その判別分析への応用を紹介いたしました。高次元において、単純な標本平均ベクトルによる推定量は巨大なノイズに汚染されてしまいますが、ノイズ構造を詳細に解析することで、複雑な計算を要さずノイズを除去することが可能になります。提案法は実装も容易であり、高次元データ解析の現場でも広く活用していただければ幸いです。

発表を通して頂いた多くの貴重なご意見は、私にとって大変有意義な糧となりました。今回の受賞を励みに、今後も一層研究に精進して参ります。

川戸健太竜 (東京大学)

この度は、優秀発表賞という栄誉ある賞にご選出いただき、誠に光栄に存じます。本大会の企画・運営にご尽力くださった皆様、ならびにご審査いただいた先生方に心より感謝申し上げます。また、日頃より熱心にご指導いただいている奥井亮先生、そして本研究を共に進めてきた共著者の坂口翔政先生に厚く御礼申し上げます。

本発表では、有限母集団におけるランダム化比較実験について、実験によるコストと処置選択を誤るリスクのトレードオフの観点を踏まえた、最適なサンプルサイズ設計という問題に取り組みました。データを得る前にサンプルサイズを決定しなければならない実務的な状況において、従来のベイズ基準やミニマックス・リグレット基準が抱える問題点を指摘し、限界費用対効果に基づく停止基準を導入することで、総サンプルサイズの3分の1を実験に割り当てるという実用的な指針を

提案いたしました。

ポスターセッションでは、多くの先生方や参加者の皆様から貴重なご意見・ご助言をいただき、大変有意義な議論を交わすことができました。今回の受賞を大きな励みとし、今後も統計学および計量経済学の発展に貢献できるよう、一層研究に邁進していく所存です。

塩谷 天章（東京大学）

この度はポスターセッション優秀発表賞にご選出いただき、誠に光栄に存じます。大会の企画・運営に携わられた皆様、審査をしてくださった先生方に、心より感謝申し上げます。指導教員の吉田朋広先生、共著者の林高樹先生と小池祐太先生、また日頃から支えてくださっている皆様に深く感謝申し上げます。

本発表では、点過程におけるリード・ラグ関係の推定について、高頻度金融データ解析の文脈で経験的に用いられてきた Dobrev-Schaumburg の方法に理論的解釈を与え、さらにその欠点を克服するカーネル推定に基づく方法を提案いたしました。また、提案した方法が手動での超パラメータチューニングなしにミニマックス最適に近い収束率を達成することを理論的に示し、シミュレーションや実証分析によりパフォーマンスを検証しました。

ポスター発表では多くの貴重なご意見をいただき、大変有意義な機会となりました。今回の受賞を励みに、点過程データの統計解析について、理論と応用の両面からよりいっそう研究を深めてまいります。

鈴木俊太郎（大阪大学）

この度は優秀発表賞を賜り、大変光栄に存じます。大会の企画・運営に携わってくださった皆様、ならびに審査をご担当くださった先生方に、心より御礼申し上げます。また、日頃より丁寧かつ熱心にご指導くださっている指導教員の寺田吉壺先生、ともに研鑽を積んできた大阪大学統計グループの皆様、そして日々支えてくださったすべ

ての皆様深く感謝申し上げます。今後も一層研究に励んでまいります。

本発表では、非線形な関数型自己回帰（NFAR）モデルが指数混合性を持つための十分条件を導出しました。さらにその応用として、同モデルに対して作用素学習を用いた予測を行う場合の集中不等式を導出しました。これにより、様々な作用素学習モデルを NFAR の予測に適用した際の汎化誤差を導出することが可能となり、NFAR における作用素学習理論のさらなる発展が期待されます。作用素学習に関する理論は未開拓な領域も多く残されており、今後も本分野の研究に尽力していく所存です。

宮崎隆之介（一橋大学）

この度は、優秀発表賞にご選出いただき、誠に光栄に存じます。本報告をこのように評価していただきましたことを、大変嬉しく思っております。大会運営に携わられた皆様、審査をしてくださった先生方に、心より感謝申し上げます。また、日頃よりご指導いただいている先生方にも深く御礼申し上げます。

本研究では、条件付き独立性検定の問題に取り組み、複雑データにも適用可能な新たな統計的方法の構築を目指しました。特に、カーネル法に基づく枠組みを通じて、従来よりも広い対象に対応でき、高次元に強い柔軟な方法を提案し、その理論的性質についても検討しました。

発表では、多くの貴重なご質問やご助言をいただき、大変有意義な機会となりました。今回の受賞を励みに、今後も研究をさらに発展させてまいりたいと考えております。

ポスターセッション学生優秀発表賞 受賞のことば

石嶺 隼（筑波大学）

この度は学生優秀発表賞にご選出いただき、大変光栄に存じます。本大会の企画・運営に携わってくださった関係者の皆様、ならびに審査をして

くださった先生方に心より感謝申し上げます。また、日頃よりご指導いただいている青嶋誠先生、矢田和善先生をはじめ、研究室の皆様にも深く御礼申し上げます。

本発表では、行列型データ解析の手法である two-dimensional principal component analysis (2DPCA) に着目し、高次元小標本下における漸近的性質について理論的に検討しました。特に、高次元小標本の枠組みのもとで標本共分散行列に含まれるノイズの影響を解析し、主要な固有値および固有ベクトルの挙動について考察しました。さらに、実データ解析を通して2DPCAを用いたクラスタリングへの応用可能性についても検討しました。

ポスター発表では、多くの先生方から貴重なご意見やご助言をいただき、大変有意義な議論の機会となりました。今回の受賞を励みに、今後の自身の活動をさらに発展させていけるよう一層努力してまいります。

葛本 大志 (東京大学)

この度は学生優秀発表賞という栄誉ある賞に選出していただき、誠にありがとうございます。大会の企画・運営に携わられた皆様、ならびに審査をしてくださった先生方に心より感謝申し上げます。また指導教官の今泉允聡先生、ならびに研究の進行において直接ご指導いただいた大田浩史さんにも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本発表では、ノンパラメトリック回帰における局所適応的な推定法であるトレンドフィルタリングに対する統計的推論について研究を行いました。トレンドフィルタリング推定量は非線形であるため従来の確率論的手法を直接適用することが難しいという課題があります。本研究では、推定量の局所的挙動を捉える識別表現を導出し、さらにリサンプリングの考え方に基づいて未知の統計量の分布を近似することで、信頼バンドを構成する方法を提案しました。

ポスター発表では多くの貴重なご意見をいただき、大変有意義な議論をさせていただきました。今回の受賞を励みに、今後も研究を一層深めてま

いります。

福士 歩 (東京大学)

この度はこのような大変栄誉ある賞を賜りましたこと、誠に光栄に存じます。指導教員の松田先生をはじめ、日々意見をくださる先生方と数理情報第四研究室の学生の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究では、パラメータの推定量の一般化された分散に対し、Cramér-Rao 型の下界、及びさらにその下界を達成する統計モデルと推定量を与えました。結果として、それらは Fisher 情報量・指数型分布族・最尤推定量の関係性の一般化を与え、個別に知られていた Cramér-Rao 不等式のアナロジーと等号達成の仕組みは非常に普遍的で、かつ情報幾何的に自然な現象であることが分かりました。

今回のポスター発表では貴重な意見・コメントを多くいただきました。また、数理統計と情報幾何学を専攻する者として、甘利先生の貴重なご講演を拝聴できたことも大変幸運でした。今後も研究に邁進し、学問の進展に微力ながら貢献させていただきたいと存じます。

前田 煌 (東京大学)

この度は名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。この場を借りて、今年度よりご指導いただいている駒木先生に感謝申し上げます。

本研究では、従来の双曲空間埋め込み手法を Lorentz Cone 埋め込みへと拡張することに取り組みました。多くの潜在表現モデルでは低次元空間として Euclid 空間が用いられますが、その潜在空間の盲目的な選択がモデル性能の限界を与えてしまう可能性があります。このような背景から、近年では木構造などのデータに対して負曲率を持つ双曲空間への埋め込みが有効であることが知られています。しかし、双曲空間は曲率が一定であるため、埋め込みの自由度に制約を与える可能性もあります。そこで本研究では、負曲率から平坦までの多様な曲率構造を持つ Lorentz Cone を潜在

空間として検討しました。

数値実験では既存の双曲埋め込み手法と同程度の性能に留まりましたが、今後は Symmetric Cone に由来する構造に強みがないかも検討していきたい

と考えています。また、このような例に慣れ親しむことで、潜在空間というものについてより一般的な考察を深めていきたいと思います。今回の受賞を励みに、今後も研究に励んでまいります。

3. 第31回日本統計学会賞について

狩野 裕（日本統計学会会長）

2026年度の日本統計学会賞は、以下の方に授与することが決まりました。

[1] 受賞者氏名：増田 弘毅 氏

略歴：1999年 早稲田大学理工学部情報学科卒業、2004年 東京大学大学院数理科学研究科博士課程修了・数理科学博士、2004年 九州大学大学院数理学研究院助手、2010年 九州大学大学院数理学研究院准教授、2011年 九州大学マス・フォア・インダストリ研究所准教授、2015年 九州大学大学院数理学研究院教授、2022年 東京大学大学院数理科学研究科教授、現在に至る。

授賞理由：増田氏はこれまで、非正規型の確率過程モデルの漸近推測について重要な貢献をしてきた。とくに顕著な貢献として、非線形レヴィ駆動型確率微分方程式モデルを統一的に扱うための正規型擬似尤度および非正規安定型擬似尤度を導入し、それらの相補的な性質を解明するとともに、理論を体系化したことが挙げられる。また、局所漸近二次構造をもつ広範な統計モデル族に対するシュワルツ型情報量規準の一般形を導出し、さまざまな後続研究の進展に多大な影響を及ぼした。レヴィ駆動型モデルの AIC および BIC として非自明な正しい形も導いている。いずれの結果もレヴィ過程のもつ多様な微小時間確率構造を適切に捉えつつ簡明な形式で与えられており、実用・実装まで視野に入れつつ当該分野の理論基盤を展開するものである。同氏はこれまで Lecture Notes in Mathematics (Springer) からの招待執筆や数理統計・確率解析コミュニティからの招待講演も多数おこなってきており、国際的にも広く認知されて

いる。同氏の一連の研究成果は、レヴィ駆動型統計モデルの推測に、ひいては確率過程の統計学の発展に大きく貢献するものである。増田氏の統計学の発展および普及に対する多大な貢献は、日本統計学会賞に相応しい。

主要業績：

- [1] Eguchi, S. and Masuda, H. (2024), Gaussian quasi-information criteria for ergodic Lévy driven SDE. *Annals of the Institute of Statistical Mathematics*, 76, 111-157.
- [2] Masuda, H. (2023), Optimal stable Ornstein-Uhlenbeck regression. *Japanese Journal of Statistics and Data Science*, 6, 573-605.
- [3] Masuda, H., Mercuri, L. and Uehara, Y. (2022), Noise inference for ergodic Lévy driven SDE. *Electronic Journal of Statistics*, 16 (1), 2432-2474.
- [4] Masuda, H. (2019), Non-Gaussian quasi-likelihood estimation of SDE driven by locally stable Lévy process. *Stochastic Processes and their Applications*, 129 (3), 1013-1059.
- [5] Eguchi, S. and Masuda, H. (2018), Schwarz type model comparison for LAQ models. *Bernoulli*, 24 (3), 2278-2327.

[2] 受賞者氏名：樋口 知之 氏

略歴：1984年東京大学理学部卒業、1989年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士号取得、1989年統計数理研究所助手、1994年同助教授、2002年同教授、2004年統計数理研究所副所長、2011年統計数理研究所所長、情報・システム研究機構理事、2014年総合研究大学院大学教育研

究評議会評議員，2019年中央大学教授，統計数理研究所名誉教授，現在に至る。2020年11月「現代の名工」受賞。

授賞理由：樋口知之氏は，時系列解析，ベイジアンモデリング，統計計算を中心としたデータサイエンス分野において顕著な成果を挙げてきた。時系列解析では，Higuchi 法として広く知られるフラクタル解析法や粒子フィルタにおける退化問題を解決する手法を提案し，当該分野に顕著な成果をもたらした。また，ベイジアンモデリングと統計計算の応用として，ライフサイエンス，マーケティング，センサ・IoT など多様な応用分野で成果を挙げた。特に，気象・海洋学分野の手法であったデータ同化を統計科学の観点から整理し，他分野に拡大するパイオニアとして活動したことで，データ同化の適用分野が大きく拡大し，諸科学・産業の発展に寄与した。加えて，統計数理研究所所長，日本統計学会会長，統計関連学会理事長等の要職を歴任し，人材育成や統計学の発展・普及にも尽力した。その活動は，統計数理研究所統計思考院の人材育成事業，海外諸機関・コミュニティとの交流による国際化，国内の数学・数理

科学分野との連携，女性研究者の育成など枚挙に暇ない。樋口氏の統計学・データサイエンス分野への貢献は多岐にわたる顕著なものであり，日本統計学会賞にふさわしいものである。

主要業績：

- [1] 樋口知之（編著）他（2011）.「データ同化入門：次世代のシミュレーション技術」，朝倉書店。
- [2] S. Imoto, T. Higuchi, et al.(2004). Combining microarrays and biological knowledge for estimating gene networks via Bayesian networks, Journal of bioinformatics and computational biology, 2 (1), 77-98.
- [3] S. Nakano, G. Ueno, and T. Higuchi(2007). Merging particle filter for sequential data assimilation, Nonlinear Processes in Geophysics, 14 (2), 395-408.
- [4] T. Higuchi (1997). Monte Carlo filter using the genetic algorithm operators, Journal of Statistical Computation and Simulation, 59 (1), 1-23.
- [5] T. Higuchi (1988). Approach to an irregular time series on the basis of the fractal theory, Physica D: Nonlinear Phenomena, 31 (2), 277-283.

4. 第6回 日本統計学会中村隆英賞について

狩野 裕（日本統計学会会長）

2026年度の日本統計学会中村隆英賞は，以下の方に授与することが決まりました。

[1] 受賞者氏名：樋口 美雄氏

略歴：1975年慶応義塾大学商学部卒業，1977年慶応義塾大学商学部助手，1980年慶応義塾大学大学院大学院商学研究科後期博士課程修了，1982年慶応義塾大学商学部助教授，1991年商学博士 慶応義塾大学商学部教授，1993年一橋大学経済研究所客員教授，1995年オハイオ州立大学経済学部客員教授，2009年統計委員会委員長，慶應義塾大学商学部長，2010年日本学術会議経済学委員会委員長，2012年日本経済学会会長，2013年労働政策審

議会会長，2016年紫綬褒章，2018年労働政策研究・研修機構理事長，2019年慶応義塾大学名誉教授，2025年日本学士院会員，現在に至る。

授賞理由：樋口美雄氏は，公的統計のマイクロデータ2次利用や匿名データ活用の道を切り開き，自らもパネルデータを開発し，適切な推定方法によって動学仮説を検証し，国際比較を行ってきた。80年代の米国留学を機にNLSやPSIDの調査機関を訪問し，マイクロデータ開発や動学分析を体験した。帰国後，その有効性を中村隆英先生に伝えたところ，日本での具体的活用法を検討するようにとの指導を受け，『就業構造基本調査』や『全国消費実態調査』の個票を使って，ダグラス

= 有沢法則やその変化、離転職に伴う雇用条件の変化、個人・企業特性による違いを検証した。90年代に入り、女性就業やキャリア形成支援、税・社会保障、労働時間・雇用法制、資産形成等の制度改革の効果分析（EBPM）を行うには、同一個人・企業を追跡したパネルデータが必要だと考え、自らリーダーとして『消費生活に関するパネル調査』、『日本家計パネル調査』、『新規開業企業パネル調査』、『新型コロナ期の家計・企業パネル調査』を分析し動的仮説検証を行うとともに、これらのデータを他研究者に公開してきた。長年にわたる樋口氏の研究功績は日本統計学会中村隆英賞に相応しい。

主要業績：

- [1] “The Dynamics of Poverty and the Promotion of Transition from Non-Regular to Regular Employment in Japan: Economic Effects of Minimum Wage Revision and Job Training Support,” The Japanese Economic Review, 64 (2), 2013.
- [2] 『雇用と失業の経済学』 日本経済新聞社 2001
- [3] “Family Leave Policies and Women’s Retention After Childbirth: Evidence from the United States, Britain and Japan,” with J. Waldfogel and M. Abe, Population Economics, 12 (4), 1999
- [4] “Japan’s Changing Wage Structure; the Impact of Internal Factors and International Competition,” Journal of Japanese Economies, 3 (4), 1989
- [5] 『日本経済と就業構造』 (東洋経済新報社) 1989

[2] 受賞者氏名：椿 広計 氏

略歴：1982年東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻修士課程修了，同年東京大学工学部計数工学科助手，1987年慶應義塾大学理工学部数理学科講師，1997年筑波大学大学院経営システム科学専攻助教授，2000年同大学院教授2007年統計数理研究所データ科学研究系教授，2010年同研究所副所長，2015年独立行政法人統計センター理事長，2019年情報・システム研究機構理事・統計数理研究所所長，2024年情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設副施設長，現在に至

る。2026年学校法人昭和女子大学理事長，現在に至る。

授賞理由：椿広計氏は品質マネジメントを専門とする統計家として、多くの分野に貢献してきた。所属した東京大学、慶應義塾大学、筑波大学、統計数理研究所、統計センターにおいて、様々な分野の人々と共同研究を重ねる中で、公的統計マイクロデータの二次利用に関する研究と実務、また統計作成プロセスの第3者適合性評価に関する研究と実装を主導した。また、統計センター理事長や総務省統計委員会委員長等を通じて、公的統計の品質保証や二次利用制度の整備に関与し、研究者・行政・民間が連携して経済統計を活用できる制度的枠組みにも貢献してきた。これらの取り組みは、EBPMの定着や実証研究の発展を支え、我が国の経済統計を政策立案や社会課題解決を支える知的基盤として高度化するものであり、その社会的意義は極めて大きい。長年にわたる椿氏の研究功績は日本統計学会中村隆英賞に相応しい。

主要業績：

- [1] 椿広計 (2025) 統計作成者から見た日本の公的統計データの現状と課題，日本労働研究雑誌 67 (779)14-24.
- [2] 山下 雅代, 椿 広計, 飯島 信也 (2019) 教育用標準データセット (SSDSE) による探究型統計教育の促進：総務省統計コミュニティの試み (特集 数学科におけるデータサイエンス (1))，日本数学教育学会誌101 (3)40-47.
- [3] 篠恭彦, 澤村保則, 本間怜志, 椿広計 (2018) JSQC規格 JSQC-Std89-001「公的統計調査のプロセス-指針と要求事項」，品質48 (3) 238-242.
- [4] 岡檀, 山内慶太, 椿広計 (2017) 在宅介護負担が増える要因の探索;社会生活基本調査・生活時間編を用いての検討，日本社会精神医学会雑誌 26 (3)246-247.
- [5] 松田芳郎, 伴金美, 美添泰人・編著 (2000) 『マイクロ統計の集計解析と技法』，講座マイクロ統計分析②，日本評論社 (椿 広計・分担執筆，範囲: 5章3節「欠測値とその補完」，6章2節3項「S-plus」).

5. 第22回日本統計学会統計活動賞について

狩野 裕（日本統計学会会長）

2026年度の日本統計学会統計活動賞は、以下のよう
に授与することが決まりました。

受賞団体名：（一財）日本統計協会（理事長 川崎 茂氏）

活動：月刊誌『統計』による統計学及び統計の普及・啓発活動

授賞理由：月刊誌『統計』（（一財）日本統計協会発行）は、統計学及び統計の普及・啓発を目的として1947年から刊行されている月刊誌である。同誌は、統計実務家、統計研究者、統計入門者などを主な対象として比較的平易な内容となっており、統計に関心のある読者に広く親しまれてきた。取り扱っているテーマは、創刊初期には公的

統計、人口・経済統計等が中心であったが、その後の統計学及び統計実務の発展に対応して、標本調査手法や様々な推計・分析の手法等も取り扱うようになるなど、対象範囲が順次拡充されてきた。さらに最近では、公的ミクロ統計データ分析、統計教育、データサイエンスなどの発展に対応して、統計学及び統計に関わる最新の話題も幅広く取り扱っている。約80年にもわたり継続されている同誌を刊行する活動は、社会における統計学及び統計の普及・啓発に重要な貢献をしており、今後もさらなる発展が期待されることから、日本統計学会統計活動賞を受賞するにふさわしい活動である。

6. 第22回日本統計学会統計教育賞について

狩野 裕（日本統計学会会長）

2026年日本統計学会統計教育賞は、以下のよう
に授与することが決まりました。

[1] 受賞団体名：株式会社 Rejoui

略歴：株式会社 Rejoui は2016年の創業以来、データサイエンスを軸とした社会課題の解決に取り組んできた。企業を中心にデータ分析や AI 活用、DX 推進の支援を行う一方、2019 年からは各省庁、自治体、教育機関等とも連携し、データサイエンスの社会実装と人材育成に注力している。企画立案から現場への実装、教材開発までを一貫して担い、教育分野における持続的な価値創出を推進している。特に、自らの事業経験に基づき、実業界におけるデータ活用の事例を体系化した教育カリキュラムの開発を強みとしている。代表の菅由紀子氏が持つ統計学・データサイエンス分野の専門的知見と、教育機関での豊富な指導経験が、

同社の事業活動および教育事業の強固な基盤を形成している。

授賞理由：株式会社 Rejoui は、小学生から社会人・教育者に至る全世代を対象に、実データに基づく仮説検証プロセスを中核とし、社会課題の解決に接続する統計教育を、課題解決型学習（PBL）を通じて展開している。とりわけ、総務省統計局との連携による統計教育事業や、地方自治体と協働した EBPM 推進事業、初等中等教育におけるデータサイエンス教材開発・教員研修などを通じて、教育と社会実装を一体的に推進してきた点は特筆すべきである。2016 年の創業以来、現場の課題に寄り添った伴走型の支援を継続し、実社会におけるデータ活用の知見を教育へ還元する体系的な教育モデルを構築しており、我が国のデータサイエンス教育の裾野拡大と質的向上の双方に顕

著な成果をあげている。以上の実績に鑑み、これまでに培った実践モデルを基に、今後も統計的思考に基づく意思決定を担う人材の育成に貢献し、統計教育の充実およびデータサイエンス教育の推進・発展に寄与することが十分に期待される。以上の活動は日本統計学会統計教育賞に相応しい。

[2] 受賞者氏名：地道 正行 氏

略歴：1987年神戸商科大学商経学部卒業，1992年大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程中退，同年同大学基礎工学部数理教室文部技官教務職員を経て，1995年関西学院大学商学部専任講師着任，1999年同大学同学部助教授昇任，2007年同大学同学部教授となり現在に至る。2006年2月大阪大学より博士(学術)を取得。2003年9月より1年間、オークランド大学統計学部（ニュージーランド）に客員研究員として滞在。

授賞理由：地道正行氏は1995年の関西学院大学商学部赴任以来30年にわたり初年次科目「統計学基礎」を担当するとともに、統計学を「データを正しく読むための文法」と位置づけた教育を一

貫して実践してきた。数学に必ずしも習熟していない学生が多い文系学部環境においても、定義の厳密さを重視しつつ理解可能な形で数式を導入し、統計的思考力の基盤形成に顕著に貢献している。さらに独自に構築した財務データ抽出システムを教育に導入し、SQLによるデータ取得からR・tidyverseを用いた前処理、可視化、統計モデリング、再現可能な分析手法までを体系的に学ぶ実践的教育を実現した。学生は実データに基づく探索的分析を通じて理論と応用を統合的に修得し、学会発表に至る成果やデータ解析コンペティションでの受賞を多数生み出している。以上の地道氏の業績は、高等教育における長年にわたる教育実践と先進的教育用データ環境の整備を通じ、他の模範となる統計教育の実践として、その発展に顕著な貢献を果たしている。また、今後も統計教育の充実およびデータサイエンス教育の推進・発展に寄与することが十分に期待され、統計教育賞に相応しい。

7. 第20回日本統計学会研究業績賞について

狩野 裕（日本統計学会会長）

2026年度の日本統計学会研究業績賞は、以下の方に授与することが決まりました。

[1] 受賞者氏名：荻原 哲平 氏

略歴：2007年東京大学理学部卒業，2012年東京大学大学院数理科学研究科博士課程中退，2013年東京大学博士（数理科学）取得，2009年三菱UFJトラスト投資工学研究所研究員，2012年大阪大学金融・保険教育研究センター特任助教，2014年統計数理研究所統計思考院助教，2015年科学技術振興機構さきがけ研究員（兼任），2019年東京大学大学院情報理工学系研究科准教授，現在に至る。

授賞理由：荻原哲平氏は、確率過程のモデルに対する最尤型・ベイズ型推定の漸近理論と、推定精度の理論的境界を与える局所漸近正規性・局所漸

近混合正規性の理論で顕著な業績を挙げてきている。退化した拡散過程のモデルやジャンプ型拡散過程のモデルに対して局所漸近（混合）正規性を初めて示し、最適推定の理論を大きく前進させた。特に確率過程モデルの局所漸近（混合）正規性の証明における理論面での重要な貢献として、従来用いられていた推移確率密度関数の評価を用いない証明を開発し、適用されるモデルを広げることが挙げられる。さらに、高頻度株価データに内在する観測非同期性やマーケット・マイクロストラクチャー・ノイズを取り入れた統計モデリングについても優れた業績を挙げている他、誤特定モデルの推測理論を発展させることで、拡散過程モデルにニューラル・ネットワークを用いた分析方法も考案・実装している。国際的に評価の高い学

術誌で出版されたこれら一連の研究成果は従属性データの統計学の裾野を広げるものであり、日本統計学会研究業績賞に相応しいものである。

主要業績：

- [1] Ogihara, T. and Stadje, M. (2024). Efficient drift parameter estimation for ergodic solutions of backward SDEs, *Scandinavian Journal of Statistics*, 51 (3), 1181-1205.
- [2] Fukasawa, M. and Ogihara, T. (2024). Malliavin Calculus Techniques for Local Asymptotic Mixed Normality and Their Application to Hypocoelliptic Diffusions, *Bernoulli*, 30 (2), 983 - 1006.
- [3] Ogihara, T. and Uehara, Y. (2023). Local Asymptotic Normality for Ergodic Jump-Diffusion Processes via Transition Density Approximation, *Bernoulli*, 29 (3), 2342-2366.
- [4] Ogihara, T. (2023). Asymptotically efficient estimation for diffusion processes with nonsynchronous observations, *Japanese Journal of Statistics and Data Science*, 6, 505-550.
- [5] Ogihara, T. (2021). Misspecified diffusion models with high-frequency observations and an application to neural networks, *Stochastic Processes and their Applications*, 142, 245-292.

[2] 受賞者氏名：栗栖 大輔氏

略歴：2014年京都大学理学部理学科卒業，2016年東京大学大学院経済学研究科修士課程修了，2018年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了，同年東京工業大学工学院経営工学系助教，2022年横浜国立大学国際社会科学研究院准教授，2023年東京大学空間情報科学研究センター准教授，2026年東京大学大学院経済学研究科准教授，現在に至る。

授賞理由：栗栖大輔氏は時系列データ，空間デー

タ解析に加え，関数データ，多様体データを含む非ユークリッドデータ解析において優れた研究業績を上げており，研究成果は *Journal of the Royal Statistical Society, Series B* などの統計科学・計量経済分野において国際的に評価の高い学術誌に掲載されている。これらの研究は，時空間統計分野並びに距離空間に値をとるデータを統一的に扱う統計分野であるランダムオブジェクト解析の発展とその計量経済学等の関連分野に裾野を広げることにより大きく貢献している。特に非定常空間データのノンパラメトリック解析，ランダムオブジェクトのノンパラメトリック解析とその因果推論への応用に関する研究では，当該分野を牽引する研究者として国際的に認知されている。栗栖氏のこのような顕著な貢献は，日本統計学会研究業績賞にふさわしいものである。

主要業績：

- [1] Kurisu, D. and Otsu, T. (2026). Empirical likelihood for manifolds, *Journal of the Royal Statistical Society Series B: Statistical Methodology*, 88 (1), 91-119.
- [2] Kurisu, D., Otsu, T. and Xu, M. (2026). Nonparametric causal inference with functional covariates, *Journal of Business & Economic Statistics*, 44 (1), 53-66.
- [3] Kurisu, D. and Matsuda, Y. (2026). Series ridge regression for spatial data on Rd, *Bernoulli*, 32 (1), 590-614.
- [4] Kurisu, D., Fukami, R. and Koike Y. (2025). Adaptive deep learning for nonlinear time series models, *Bernoulli*, 31 (1), 240-270.
- [5] Kurisu, D. (2022). Nonparametric regression for locally stationary functional time series, *Electronic Journal of Statistics*, 16, 3973-3995.

8. 第19回日本統計学会出版賞について

狩野 裕 (日本統計学会会長)

2026年度の日本統計学会出版賞は、該当なしとすることが決まりました。

9. 第40回日本統計学会小川研究奨励賞について

狩野 裕 (日本統計学会会長)

2026年度の日本統計学会小川研究奨励賞は、以下の方に授与することが決まりました。

[1] 受賞者氏名：後藤 佑一氏

略歴：2018年3月早稲田大学教育学部数学科卒業，2019年3月早稲田大学大学院基幹理工学研究科修士課程修了，2019年4月独立行政法人日本学術振興会，特別研究員 DC1，2021年3月同博士後期課程修了，2021年4月早稲田大学基幹理工学部講師，2022年4月九州大学数理学研究院助教，現在に至る。2023年4月より東北大学 大学院経済学研究科 客員研究員，2025年4月より日本数学会 在外研究奨励フェロー。

授賞論文：

- [1] Boucher, M., Francq, C., Goto, Y., and Verdebout, T. (2025+) “On runs tests for directional data and their local and asymptotic optimality properties”, to appear in *Statistica Sinica* 37 (2)
- [2] Goto, Y. and Fujimori K. (2025) “A test for counting sequences of integer-valued autoregressive models”, *Electronic Journal of Statistics*. 19 (2), 4117–4140
- [3] Goto, Y., Arakaki, K., Liu, Y., and Taniguchi, M. (2023). “Homogeneity tests for one-way models with dependent errors under correlated groups”, *TEST*, 32 (1), 163–183.
- [4] Goto, Y., Kaneko, T., Kojima, S., and Taniguchi, M. (2022). “Likelihood ratio processes under

nonstandard settings”, *Theory of Probability & Its Applications* 67 (2), 246–260.

- [5] Goto, Y., Kley, T., Van Hecke, R., Volgushev, S., Dette, H., Hallin, M. (2022). The integrated copula spectrum, *Annals of Statistics*, 50 (6), 3563–3591.

受賞論文の評価：後藤佑一氏は，統計的時系列解析および複雑依存構造を持つデータに対する推論理論についての研究を推進している。論文 [1] では，超球面上データにおける系列相関の検定を扱い，Tangent Markov model の導入により局所漸近正規性 (LAN) を確立し，ランズ検定が局所漸近最適性を有することを示した。論文 [2] では，計数時系列の自己回帰モデルにおいて，二項間引き作用素の妥当性を検証する検定問題を扱い，新たな検定手法を構築して漸近的性質を導出した。論文 [3] では群間に相関構造を持つ時系列一元配置モデルにおける群間差の検定問題を扱い，F 統計量の拡張を提案し，その漸近分布および検定手法の理論的妥当性を証明した。論文 [4] では，同時方程式モデルにおける曲指数型分布族の構造下での LAN 成立を示すとともに，一元配置モデルにおける尤度比の特異な漸近展開を明らかにした。論文 [5] では，コンピュータ経験過程を導入して従来のスペクトル解析を拡張し，自己共分散に依存する線形スペクトル解析の枠組みを脱し，分布全体を保持するスペクトル解析の理論体系を構築した。これらの後藤氏の業績は小川研究奨励賞に相応しいものである。

10. 第8回細谷賞授賞について

サービス・データ科学研究センター
細谷賞選考委員会

東北大学大学院経済学研究科では、細谷雄三名誉教授の統計学界における教育・研究への貢献を記念して、広く人文・社会科学分野における若手研究者のデータ科学研究を奨励するため、2018年に細谷賞を創設しました。2026年3月31日を期日に第8回受賞候補者の公募を行い、学外レビューアーによるコメントをもとに、慎重な審査・選考を行いました。ここに選考結果を報告します。なお、本賞は東北大学須永特定基金より寄付を受け日本統計学会の後援により実施しています。

第8回受賞者

1. 小池祐太（東京大学）

Koike, Y. (2026). High-dimensional bootstrap and asymptotic expansion. *Probability Theory and Related Fields*.

2. 伏島光毅（一橋大学）、澤田真行（一橋大学）

Fusejima, K., Ishihara, T. and Sawada, M. (2025). A unified test for regression discontinuity designs. *Journal of Econometrics*, 251, 106074.

講評

1. 小池氏は、高次元ベクトルの標本平均の最大値統計量に対するブートストラップ近似の精度を、漸近展開により精密に解析した。高次元同時推論では、多数の成分の最大値の分布を正確に近似することが重要であるが、次元が標本数を上回る状況では通常の標準化や共分散行列に基づく手法が困難となる。本研究は、third-moment matching wild ブートストラップが、一定の共分散構造のもとで標準化を行わずに二次精度を持つことを示し、高次元性が単なる困難ではなく、推論精度を改善し得るという本質的な現象を明らかにした。

さらに、共分散構造に依存しない double wild ブートストラップの二次精度も示しており、高次元統計推論における実用的意義も大きい。Stein kernel を用いて高次元 Edgeworth 展開を厳密に導いた点は、既存理論では十分に説明できなかったブートストラップ近似の高次精度を理論的に解明するものであり、高次元データ解析の基礎理論に対する重要な貢献である。

2. 伏島氏と澤田氏は、石原卓弥氏との共著論文において、回帰不連続デザインにおける診断検定の多重検定問題を明確に指摘し、密度検定と共変量バランス検定を統一的に扱う検定法を提案した。回帰不連続デザインは、社会科学における因果推論の代表的手法であり、その妥当性確認には、閾値における割当変数の密度の連続性や、処置前共変量のバランスが検証される。しかし既存の実証研究では、これら多数の診断検定が個別に解釈されることが多く、偶然の有意性による過剰棄却が生じ得る。本研究は、既存の実証研究における診断検定の運用を詳細に調査し、この問題を具体的に示したうえで、局所多項式推定量の同時漸近正規性に基づく統一的検定手続きを構築した。特に、密度推定量と条件付き平均推定量の漸近的直交性を利用し、sWald 検定および Max 検定という実装可能な手続きを与えている。これは、社会科学における因果推論の実証実務を統計的により適切なものへ改善する成果であり、データ科学の社会科学への応用として高く評価できる。

受賞者略歴

1. 小池祐太氏

2010 東京工業大学（現 東京科学大学）理学部数学科卒業

2015 博士（数理科学、東京大学）

2017- 東京大学大学院数理科学研究科准教授

2. 伏島光毅氏

2018 東京大学経済学部経済学科卒業

2023 東京大学大学院経済学研究科経済専攻統計学コース博士課程修了

2023- 一橋大学社会科学高等研究院特任講師

3. 澤田真行氏

2011 上智大学経済学部経済学科卒業

2019 Ph.D. in Economics, Yale University

2026- 一橋大学経済研究所准教授

授賞式について

2026年11月19日(木)に第8回授賞式およびHosoya Prize Lectureを開催する予定です。詳細は下記web pageをご確認ください。

<https://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/hosoyaprize.html>

11. 統計検定成績優秀者

狩野 裕 (日本統計学会会長)
青嶋 誠 (日本統計学会理事長)

2025年11月16日に統計検定が行われました。以下に、各試験種別の合格者のうち、成績優秀者でかつ公開に同意された方々の氏名を掲載します。掲載は姓の五十音順です(敬称略)。また以下の情報は統計検定のホームページでも公開しております。

準1級

最優秀成績賞(S): WU ZIYIN, セガル詩文, 越後裕貴, 遠藤洸亮, 岡田賢太, 河村洋佑, 角友登, 葛西智基, 及川翔太, 原悠真, 五十嵐雅尚, 後藤洋, 今村奏斗, 坂野一志, 山谷知輝, 山田瑛平, 秋田圭佑, 祝迫大樹, 新出宏樹, 森内健矢, 深瀬貴史, 西川純基, 石川雄一, 川邊舜一郎, 則竹幹人, 大澤裕一, 谷口一晃, 中川源, 藤本拓海, 二宮勇太, 富岡賢, 木村和貴, 鈴木汰生, 崔一航

優秀成績賞(A): 伊集院拓真, 伊波信之祐, 荻本晴樹, 下山達大, 吉原大賀, 原崎拓真, 甲斐野佑哉, 高田樹晟, 佐々木雄規, 佐藤響, 佐藤順, 阪口哲平, 山口晋平, 山崎大輔, 山村皐介, 山田尚之, 小池由能, 小椋匠一郎, 上前諒輔, 新出宏樹, 杉本貴美, 千葉朋幸, 大橋恒久, 大澤裕一, 地下恭輔, 池田崇, 竹下柚稀, 中村陸斗, 辻井竜太郎, 田口勲, 渡部優貴, 渡辺博文, 土田良樹, 藤川幸洋, 南里勇太, 馬場太一, 武沢瑠生, 福田健吾, 堀部元

貴, 本村吉章, 林諄, 濱口恭佑, 高橋真麻

2級

最優秀成績賞(S): Eckersall Alexander, 伊原悠梨子, 伊藤凜, 井坂健人, 宮村明孝, 古田将大, 江草太陽, 根津駿介, 佐藤ちよ, 志村敦也, 森部詩月, 水鳥翔伍, 西山晴矢, 大澤裕一, 塚原隆博, 藤原龍治, 内田晃雅, 日下和樹, 平田祐樹, 平野桂太, 里村龍音

優秀成績賞(A): BO YI, 越智佳景, 奥貫昇太, 奥谷将太, 奥野晃平, 沖田祐二, 花島光優, 賀正午, 亀井ゆとり, 吉見嵩志, 橋本啓太郎, 近藤洋平, 栗巢野陽太, 原颯太郎, 古川翔馬, 工藤莞駒, 溝端良健, 高宮日南子, 高橋優奈, 高嶋雄大, 黒田勝大, 坂東智, 笹原蒼生, 三浦颯太, 山口真楓, 山口瞭, 山本怜, 山崎晶斗, 志村駿, 柴田蓮, 酒井勝太, 秋吉晴太, 小松陽平, 小泉太郎, 小椋匠一郎, 松尾剛, 上村拓人, 新原光太郎, 新美結加, 森本悠矢, 深澤雄二郎, 真壁朝大, 須賀伝史朗, 西脇友哉, 石井裕彬, 石本梨花子, 千賀祐二, 染谷慎一郎, 草野渉, 村本琉成, 大澤裕一, 丹下弥久, 中村直貴, 中嶋一樹, 朝比奈央佳, 田渕辰樹, 田邊郁大, 土井星太朗, 土屋裕史, 東田悠生, 内藤恋, 米倉慧太, 米田敦司, 堀川ミン, 要明英賢, 廣瀬直幸, 檜垣秀一, 澤田紗知

3級

最優秀成績賞（S）：伊藤正輝，益山紗智，越智佳景，歌代慶也，岩戸咲，久保田愛，見市伸裕，原直人，原颯汰，古川紗，佐藤郎真，阪上伸太郎，山田隆一，山本達季，小林宏太郎，上田航平，織田有紀子，森下香織，森田航平，森田早帆，須長史門，水野響，清水宏章，相羽佑輔，村岡裕介，大野玲菜，中田健斗，椎谷友貴，田中則政，田中佑吾，渡邊朋，藤原智仁，白須尊大，尾崎太一，福井和輝，福田夢月，平石卓，木村遼太，友森啓，立花姫菜，國頭真理子

優秀成績賞（A）：愛甲勇輝，伊藤先，井坂真一，井上貴之，井上慎也，宇佐美昂司，越智大輔，岡裕樹，岡上英樹，加藤すみれ，河野亮人，賀正午，栢木祐人，乾絵理香，岸田康雄，岩丸佑生，宮下裕子，五島裕生，後藤悠介，高瀬ひより，高田直人，高田雄介，高野伊宥，黒田理史，今村海斗，佐々木大吾，佐竹寛，佐藤志紀，佐藤匠，佐藤匠映，笹井泉希，笹原蒼生，山崎智香，山本健斗，寺山元和，室谷典摩，酒井伍希，小出健司，小川葵，小川和也，小池真利子，小林怜央，松岡主樹，松重礼紀，松本龍哉，新井大介，森雄輝，森本朱音，神谷美波，杉崎道志，西村堇，折井海斗，舩澤真莉子，前川慶之，増田侑十，大江晃代，大山凌平，大川竜生，大脇俊紘，竹原菜々子，竹谷駿佑，中村洋文，中島直哉，猪亦佑也，朝比奈歩輝，長島史央，渡邊秀久，土庵アン，島村博道，東智大，筒井瑞稀，藤井陽大，内藤蒼介，内藤友貴，南光太郎，畠山蒼太，飯野義輝，尾関晃，尾毛谷昌弘，武田龍之介，平井孝汰，平田綾音，平尾明日香，保科貴哉，峰寛幸，峰美智子，堀上敬祐，木村知樹，柳悠太，鰐淵千尋，廣田俊作，櫻井佳樹，藪皓介，齊藤潤一，齊藤美優

4級

最優秀成績賞（S）：古川紗，荒田香那妙，秋山勇哉，杉山智昭，石原佳奈，直井裕和，定岡麻緒，保栖理恵子，北村悠，木村結惟，木本武一郎，鈴木健人，和泉佑志朗，廣川諒，濱一輝，濱秀人，齊藤基
優秀成績賞（A）：リビカン，伊藤千夏，衣笠晴

人，衛斌，越山悠介，遠山晃一，横本琢馬，黄嘉楓，岡林佳吾，加賀谷翔聖，亀山真由美，吉田久子，宮本幸明，宮野直樹，橋口央，熊上学，君島真純，古谷文，降田玲旺，高橋史菜，佐々木済，佐藤友紀，佐藤蓮，山中真希，山田貴弘，山田紘毅，山田悠月，山本晋，山本悠平，鹿野優，柴垣俊人，小城武志，小西諒，小倉同志朗，松井士佑，松島瞳，新城利行，垂井篤志，菅妃那，星野果南，石田晶，川上拓人，川村勇輝，曾我部夏帆，増田晴己，村山真優，大泉七絵，大田哲，大木要，中村篤典，中野暁人，中野慈，張濟恒，長山知稜，長谷川雅也，椎野景子，渡邊弘樹，土江樹，楠見莉沙，二神啓，梅津優奈，平崎勲，平泉新，望月彩世，北條真央，木下雄介，門脇愛，梁川陽樹，鈴木啓太，閻天湛，高田真吾

統計調査士

最優秀成績賞（S）：加藤幸

優秀成績賞（A）：尾前雄彦

専門統計調査士

最優秀成績賞（S）：井上秀一郎，森光太郎，中野遼太，塚田有紀也

優秀成績賞（A）：井上桃子，吉岡卓也，橋本ゆうき，中山裕貴，田中巧，堀千里，目代風

データサイエンス基礎

最優秀成績賞（S）：安尾咲樂，岡崎凌，床建吾，上西孝明，神峯英正，大西康夫，薄葉海和，八嶽友美，福江修平，牧村雄

優秀成績賞（A）：花田涼也，吉村多功，宮下浩輝，坂本翔，山口英孝，小林舟佑，松林啓太，森口賢一，石井真衣，前田健太郎，大川颯，中西睦，中村洋文，湯山敦司，飯島裕基，末次弘昂，陸強，鈴木正人

データサイエンス発展

最優秀成績賞（S）：五島剛，松岡慶，池田真彬，渡邊智信，日下和樹

優秀成績賞（A）：安部翔平，佐伯晃聖，小林直

12. 統計検定合格者の声

狩野 裕 (日本統計学会会長)
青嶋 誠 (日本統計学会理事長)

統計検定準1級

渡部 優貴さん (株式会社 メルカリ)

統計学は生成 AI 時代における教養である

【統計検定学習の動機】

第二子の誕生に伴う育児休業の取得中に、育児の合間にできたスキマ時間を活用して、何かスキルアップにつながる学びを得たいと考え、統計学の学習を始めました。統計学に関心を持った背景には、私の本業であるソフトウェアエンジニアとしての問題意識があります。近年の生成 AI の急速な進化により、エンジニアには単なるプログラミングスキルにとどまらず、「AI の構造を深く理解し、使いこなすこと」が強く求められるようになっていと感じます。統計学はまさにその中核をなす教養であり、今後の技術的トレンドに適応するための不可欠な知識だと捉えました。せっかく体系的に学ぶのであれば、知識を定量的に証明できる手段が欲しい——そう考えて資格試験を調べる中で、統計検定の存在を知りました。広範な統計手法を学びたいと考えていたため、まずは2級から始め、最終的に準1級を目指すことに決めました。

【学習時に気をつけたこと】

受験に際しては、育児の合間で完遂できるような学習効率を最大限に重視した計画を立てました。インプットには『統計学実践ワークブック』を、アウトプットには『統計検定準1級公式問題集』に加え、『統計検定2級公式問題集』も併用しました。準1級の出題範囲には2級の内容も含まれているため、2級分野を確実な得点源とする狙いがありました。実際、2級分野の問題は比較

的難易度が抑えられているため、落とさないことで全体の安定感を高められると判断しました。ワークブックの理解が追いつかない箇所には直面した際は、YouTube やブログ記事を活用して、「例と例題だけでも理解する」ことを重視し、限られた時間の中でも深く学べるよう取捨選択を行いました。

さらに、頻出分野については理解を深めるために専門書も読みました。数理統計の基礎固めには『確率統計キャンパス・ゼミ』を、加えて『多変量解析がわかる』や『道具としてのベイズ統計』なども読み込み、準1級に必要な幅広い概念を網羅的に学習しました。

私は文系出身であり、数学的素養に対して不安があったため、統計を本質的に理解するには基礎数学の補強が不可欠だと判断しました。そのため、『ゼロから学ぶ微分積分』『ゼロから学ぶ線形代数』を通して、微分積分と線形代数の基礎力を体系的に身につけることにも注力しました。

【今後について】

こうした学習の成果として、準1級を初回の受験で合格を果たし、さらに成績優秀賞という評価をいただけたことは、大きな自信となっています。今後は統計学という汎用性の高い知識を武器に、生成 AI を使いこなす、より高い次元でソフトウェア開発に貢献していくことを目指していきたいです。

統計検定2級

松井 直子さん（会社員）

今後は自信を持ってデータ解析を行える

私は普段ヒト試験のデータを取り扱う仕事を行っているのですが、職場（部署）のみんなで統計をちゃんと勉強し統計検定2級を取得しようということになりました。部署内で既に2級を取得している方が講師となり、主に BellCurve の「統計学の時間」HP を使って勉強会が開催されました。

私はまず、「統計学の時間」HP と Kindle 版「統計検定2級 模擬問題集」（BellCurve）で勉強し検定に臨んだのですが、1回目は59点で落ちてしまいました。

検定の問題形式や難易度は「CBT 対応 公式問題集」が当てはまることを受験で痛感しましたので、次は「CBT 対応 公式問題集」をきっちりこなし、2回目は優秀成績賞で合格できました。ちなみに、「CBT 対応 公式問題集」を「統計学の時間」や「統計検定2級 模擬問題集」のような基礎をしっかり固めた後におこなったので、それほど苦労しなかったと思っています。不合格後は地味に落ち込んでいましたが、「合格率約40%ということは合格までの期待値は $1/0.4=2.5$ 、2回目の合格でも期待値より良いんだ!」と、今回の勉強で身に着けた知識を謎の励みにして頑張りました。

今回の勉強を始めるまで、SPSS などの有料統計ソフトウェアを用いてデータ解析を行う際「こういう時にはこの機能を使って解析を行う」ということを知ってはいても「なんかよくわからないけれど、ソフトウェアが言っているっぽいので...」という状況でした。しかし、検定合格を目標に勉強を行ったことで、ブラックボックスだったところの理解が深まったので、今後は自信を持ってデータ解析を行うことができそうです。

また、積分計算は約30年ぶりという状況でしたが、検定に合格できたことで50歳を過ぎても頑張れるんだという小さな自信にもつながりました。

私の普段の仕事として、ノンパラメトリック法

の検定や二元配置分散分析を使うことがあるので、引き続き統計の勉強を行っていきたいと思います。

統計検定3級

平井 孝汰さん（兵庫県立芦屋高等学校）

数値を「解釈する力」の獲得と大学受験への応用

私は今回、統計検定3級に挑戦し、無事に合格することができました。前回受験した統計検定4級の際と同様に、日本統計学会が公式に認定しているテキストを購入し、それを中心に学習を進めました。

統計検定3級で扱われる内容は、高校数学で学習する確率やデータの分析と深く関係しており、数学の知識を復習しながら統計の考え方を身につけることができました。そのため、統計検定3級の取得を目指す学習と高校数学の学習を同時に進めることができ、部活で忙しい自分にとって限られた時間の中でも効率良く勉強できたと思っています。特に、平均や分散、標準偏差といった基本的な統計量の意味を理解できたことで、数値を「計算する」だけでなく「解釈する」力も身についたと感じています。また、統計検定3級を取得したことによって大学受験に活かしたことも良かったと思っています。

統計学はデータを客観的に捉え、物事を論理的に考えるために非常に重要であり、改めて興味深い学問であることを実感しました。そのため今後も大学でより深く統計学を学び、将来的に社会に役立つデータサイエンティストを目指して勉強に取り組んでいきたいと考えています。また、次回は統計検定2級取得にも挑戦していきたいと思います。

統計検定4級

高橋 清人さん（非公開）

社会人を経たからのデータサイエンスの勉強

社会人として、プログラマー→システムエンジニア→プロジェクトマネージャを経験し、現在に至ります。

長らく仕事に時間を費やしていましたが、学ぶ時間が必要と考え、昨年放送大学に入学しました。データサイエンス・データ解析に興味があり、統計関連の授業を受講しており、その流れで本検定のことを知り、理解度を確認するために受験することになりました。

学習方法としては、4級の統計検定テキスト「データの活用」を利用しました。何とかなるかと気軽に受験しましたが、試験はそんなに甘くありません。試験時間に余裕はなく、回答を見直す時間はありませんでした。高得点で合格できたようですが、問題集での学習も必要だったかと考えています。ただ、他の試験でCBTの利用経験があり、試験環境に戸惑うことなく、時間を確認しながら落ち着いて受験できた点が良かったのではないのでしょうか。

引き続き、3級合格を目指して学習を続けたいと考えています。

統計検定 データサイエンス基礎

山口 英孝さん（金融機関）

なじみのエクセルで手を動かして理論を体得するのに最良の資格

私は金融機関にて不動産コンサルティングなどの業務を行っています。

所属する組織でも、営業やマーケティングに係るデータベースの活用や業務効率化のための生成AIの活用などがホットな話題になっています。

本試験は統計検定2級へのステップアップの過程で受験しました。前提知識として統計検定3級と他の民間機関のデータ分析技能試験にはすでに合格、また、日常的にエクセルの計算や関数などは使用しているので、表計算や基本的なグラフ化、データ分析ツールの使用スキルは保有していました。

試験対策はテキスト『日本統計学会公式認定統計検定データサイエンス基礎対応 データアナリティクス基礎』を2回ほど繰り返し受験しました。問題の反復回数は少ないものの、理解が浅いところはテキストからダウンロードできるエクセ

ルを操作しながら納得のできるまで丁寧に読み込みました。

t検定やカイ2乗検定などの推測統計分野や、時系列データの処理などは、計算が苦手な自分にとってはエクセルを使えることで、短時間で多数のデータを処理することができ、結果理論的な理解の大きな助けになりました。合格のみならず「成績優秀賞」を頂き大変うれしく思います。いわゆるデータ分析を専門にする職業ではありませんが、実務でも少しずつ学んだ知識を生かしてまいりたいと思っています。

統計検定 データサイエンス発展

初田 元希さん（三井住友カード株式会社）

新卒データサイエンティストとしての第一歩

統計検定、その中でもデータサイエンス種別を受検した動機は、新卒でデータサイエンティストとして社会人の一歩を踏み出すことになり、自身のデータサイエンス力の把握と基礎的事項の確認をしておきたいと考えたからである。

私は大学院在籍時に半年間の長期インターンシップでのデータサイエンス業務を通じて、一企業、さらには社会課題の解決の一助となるデータサイエンスの魅力に惹かれた。しかし、大学、大学院では機械工学を専攻しており、体系的に統計学を学ぶ機会はほとんどなかった。そのため、これまで統計検定を一つの指標として活用し、統計学の知見を段階的に深めてきた。そして、今後も需要が高まっていくであろうデータサイエンティストになることを契機に今回の受検を決めた。

学習にはデータサイエンス発展に対応した日本統計学会公式認定の「データサイエンス発展演習」を用いた。まずは一通り参考書の内容をインプット後に第6章以降の例題や模擬試験問題を繰り返し解くことで知識の定着を図った。内容は基礎的なものが多く含まれているため、時間をかけることで合格点に近づくことが出来るだろう。私は、統計検定2級と準1級に合格していたため、統計分野ではそれらの知識が役立ち勉強時間を縮めることが出来た。

受検後3週間ほどで合格の賞状が届き、成績優秀者の知らせを受け取ったときは自身の成長を実感出来たと同時に、これまでの学びが正当に評価されたように感じられ、これからデータサイエンティストとして働く上で大きな励みとなった。

今後は実務を通じてデータサイエンス力をさら

に高めつつ、統計検定1級やデータサイエンスエキスパートの自己学習に取り組み、理論面の強化を図っていきたいと考えている。そして、健全なキャッシュレス社会の実現に貢献できるデータサイエンティストを目指して、今後も研鑽を重ねていく所存である。

13. 理事会・委員会報告（2026年5月9日開催）

一般社団法人 日本統計学会 理事会

日時：2026年 5月 9日（土曜日）午後1時00分～午後1時57分

場所：筑波大学 自然系学系棟 D802

オンライン理事会として実施

Zoom（ミーティング ID: 894 1373 1404）

理事の総数 14名 出席理事の数 13名

監事の総数 3名 出席監事の数 3名

出席者：

理事：青嶋誠理事長、坂田綾香（庶務）、明石郁哉（庶務）、白石博（会計）、丸山祐造（JJSD）、荒木由布子（会誌編集和文）、朝日弓未（広報）、寺田吉壺（大会／企画・行事）、江村剛志（国際）、清智也（国際）、長尾大道（渉外）、瀬尾隆（渉外）、竹内光悦（教育）（以上13名、括弧内は役割分担）

監事：照井伸彦、川崎能典、山下智志

第1議案 2025年度事業報告について

青嶋理事長より、資料に基づき、2025年度事業の報告があり、審議の結果これを承認し、社員総会に諮ることとした。

第2議案 2025年度決算報告について

青嶋理事長より、資料に基づき、2025年度決算について報告があり、白石会計理事により追加の説明がなされた。審議の結果これを承認し、社員総会に諮ることとした。

第3議案 監査報告について

照井監事、川崎監事、山下監事より、2025年度事業報告および決算の監査結果について報告があり、審議の結果これを承認し、社員総会に報告することとした。

第4議案 常設委員会における委員長・委員の交代・退任について

青嶋理事長より、資料に基づき、常設委員会の委員長・委員の交代・退任について提案があり、審議の結果これを承認し、社員総会に報告することとした。

・庶務委員会

坂田綾香委員長より明石郁哉委員長に交代（2026年5月30日付）

坂田綾香委員より村上大輔委員に交代（2026年5月30日付）

・国際委員会

江村剛志委員長より清智也委員長に交代（2026年5月30日付）

江村剛志委員より矢田和善委員に交代（2026年5月30日付）

第5議案 常設委員会における委員の再任について

青嶋理事長より、資料に基づき、常設委員会の委員の再任について提案があり、審議の結果これを承認し、社員総会に報告することとした。

・庶務委員会

白石博委員（会計）が再任（2026年5月30日付）

第6議案 常設委員会における委員の追加について

青嶋理事長より、資料に基づき、常設委員会の委員の追加について提案があり、審議の結果これを承認した。

・企画・行事委員会

岩崎学委員、小泉和之委員を追加（2026年5月30日付）

第7議案 日本統計学会賞規程の改正について

青嶋理事長より、資料に基づいて日本統計学会賞規程の改正が提案され、審議の結果、承認を得た。

第8議案 日本統計学会中村隆英賞規程の改正について

青嶋理事長より、資料に基づいて日本統計学会中村隆英賞規程の改正が提案され、審議の結果、承認を得た。

第9議案 会員の入退会

青嶋理事長より、回収資料に基づき、入退会希望者の紹介がなされ、審議の結果、承認が得られた。

一般社団法人 日本統計学会 委員会議事録

日時：2026年5月9日（土曜日）午後1時57分～午後4時2分

場所：筑波大学 自然系学系棟 D802

オンライン理事会として実施

Zoom（ミーティング ID: 894 1373 1404）

出席：理事13名、監事3名、委員0名、計16名

理事：青嶋誠理事長、坂田綾香、明石郁哉、白石博、丸山祐造、荒木由布子、朝日弓未、寺田吉壱、江村剛志、清智也、長尾大道、瀬尾隆、竹内光悦、照井伸彦（監事）、川崎能典（監事）、山下智志（監事）

<報告事項>

1. JJSD 支援委員会

丸山委員長より、JJSD の編集状況について報告がなされた。

2. 和文誌編集委員会

荒木委員長より、和文誌の編集状況について報告がなされた。

3. 大会委員会

寺田委員長より、2026年度統計関連学会連合大会の準備状況について報告がなされた。

4. 企画・行事委員会

寺田委員長より、第21回日本統計学会春季集会の準備状況について報告がなされた。

5. 庶務委員会

坂田委員長より、以下の報告がなされた。

・ウェブ名簿の運用方針について

6. 広報委員会

朝日委員長より、2026年度春季集会の録画の公開状況について報告がなされた。

7. 国際関係委員会

清委員より、以下の点について報告がなされた。

・IMS-APRM 2026 香港（6月13日～16日）

・KSS-JSS-CSA/CISP joint session（7月2日～4日）

・連合大会における JJSD セッション

8. 渉外委員会

長尾委員長より、2025年度の決算と2026年度の予算について報告がなされた。

9. 質保証委員会

瀬尾委員長より、統計質保証推進協会の統計検定運営委員会と事業委員会の報告があった。また成績優秀者に対し、第二回文部科学大臣賞表彰式が5月24日に九段会館で開催されるという報告があった。

10. 統計教育委員会

竹内委員長より、以下の項目について報告がなされた。

・「JAPAN AI CUP 中高生 AI・DS 探究部門」について

・第23回 統計・データサイエンス教育の方法論ワークショップについて

・中高生・スポーツデータ解析コンペティション—2025—の開催について

・ISLP 国際統計ポスターコンペティション 2026-2027 について

・理数系学会教育問題連絡会への対応について

11. ISI 東京大会記念基金運営委員会

樋口委員長の代理で、青嶋理事長より、第5回 ISI 東京大会記念奨励賞の募集について報告がなされた。

12. その他

なし

<審議事項>

1. JJSD 支援委員会

なし

2. 和文誌編集委員会

なし

3. 大会委員会

なし

4. 企画・行事委員会

なし

5. 庶務委員会

・授賞関係委員の増員について

6. 広報委員会

- なし
7. 国際関係委員会
なし
8. 渉外委員会
なし
9. 質保証委員会
なし
10. 統計教育委員会
なし

11. ISI 東京大会記念基金運営委員会

- なし
12. その他
なし

今後の予定

2026年5月30日（土）午後1:00 社員総会（オンライン）

14. 社員総会報告（2026年5月30日開催）

日時：2026年5月30日（土曜日）午後1時00分～午後2時18分

場所：筑波大学 自然系学系棟 D802

オンライン理事会として実施

Zoom（ミーティング ID: 836 5938 0244）

出席者：狩野裕会長、青嶋誠理事長

出席代議員：會田雅人、赤谷俊彦、足立浩平、荒木由布子、岩崎学、大森裕浩、鎌谷研吾、川崎能典、川野秀一、栗原考次、酒折文武、清水誠、瀬尾隆、高部勲、竹村彰通、田畑耕治、椿広計、富田誠、廣瀬慧、矢田和善、山下智志、山本義郎、渡辺美智子

オブザーバー：坂田綾香、明石郁哉、白石博

冒頭、狩野会長より定足数を満たしていることを確認ののち、開会宣言がなされ、オブザーバー3名の出席が承認された。狩野会長より、議事録署名人として川野秀一、田畑耕治両代議員に依頼する旨説明があり、承認された。

審議事項

第1議案 2025年度事業報告及び決算に関する件

狩野会長より、資料に基づき、2025年度事業と決算について報告があり、オブザーバーの白石会計理事より追加の説明がなされた。また、山下監事により「適切に執行された」との監査報告がなされ、審議の結果、承認された。

第2議案 日本統計学会中村隆英賞規程の改訂に関する件

る件

狩野会長より、資料に基づき、日本統計学会中村隆英賞規程の改訂について提案がなされ、審議の結果、承認された。

第3議案 日本統計学会賞規程の改訂に関する件

狩野会長より、資料に基づき、日本統計学会賞規程の改訂について提案がなされ、審議の結果、承認された。

第4議案 学会賞各賞の選考委員の承認に関する件

狩野会長より、2027年度の学会賞各賞（中村隆英賞を除く）の規程に基づく「会長が推薦する選考委員」として富澤貞男会員および南美穂子会員を推薦することが提案され、審議の結果、承認された。

第5議案 理事の選任に関する件

狩野会長より、以下のとおり理事の選任に関する提案がなされ、審議の結果、承認された。

理事（坂田綾香、江村剛志）が本社員総会の終結と同時に任期満了し、退任することになり、その改選の必要があるため、以下のように後任の理事を選任する（2026年5月30日付）。

理事 村上大輔、矢田和善

報告事項（理事会報告）

1. 会員の入退会

青嶋理事長より、回収資料に基づき、会員の入退会について報告がなされた。

2. その他

なし

報告事項（委員会報告）

1. 常設委員会における委員長・委員の交代・退任について

青嶋理事長より、資料に基づき、常設委員会の委員長および委員の交代・退任について報告がなされた。

・庶務委員会

坂田綾香委員長より明石郁哉委員長に交代（2026年5月30日付）

坂田綾香委員より村上大輔委員に交代（2026年5月30日付）

・国際関係委員会

江村剛志委員長より清智也委員長に交代（2026年5月30日付）

江村剛志委員より矢田和善委員に交代（2026年5月30日付）

2. 常設委員会における委員の再任について

青嶋理事長より、資料に基づき、常設委員会の委員の再任について報告がなされた。

・庶務委員会

白石博委員（会計）が再任（2026年5月30日付）

3. 常設委員会における委員の追加について

青嶋理事長より、資料に基づき、常設委員会の委員の追加について報告がなされた。

・企画・行事委員会

岩崎学委員、小泉和之委員を追加（2026年5月30日付）

4. 2026年度統計関連学会連合大会について

青嶋理事長より、2026年度統計関連学会連合大会が、2026年9月6日（日）～10日（木）に、横浜市立大学金

沢八景キャンパスにて、現地および遠隔（オンライン）によるハイブリッド方式で開催予定であることが報告された。

5. 第20回春季集会（2026年3月開催）の報告

青嶋理事長より、2026年3月7日（土）に同志社大学にて開催された第20回日本統計学会春季集会について報告がなされた。

6. 日本統計学会各賞受賞者の紹介

狩野会長より、資料に基づき、日本統計学会各賞の受賞者について紹介がなされた。

7. ISI 基金奨励賞 第5回 ISI 東京大会記念奨励賞 募集について

樋口委員長（ISI 東京大会記念基金運営委員会）の代理で青嶋理事長より、資料に基づき、ISI 基金奨励賞及び第5回 ISI 東京大会記念奨励賞の募集について説明がなされた。

8. その他

なし

報告事項（その他）

1. 各種委員会からの報告

竹内委員長の代理で青嶋理事長より統計教育委員会の活動について、荒木委員より多様性推進特別委員会の活動について、それぞれ資料に基づき、報告がなされた。

2. 次回日程等

役員・代議員協議会：2026年9月13日（日）13:00～14:30（予定）

3. その他

なし

2025 年度事業報告

(2025.4.1～2026.3.31)

学会の動向

日本統計学会は一般社団法人として15年目を迎え、2年周期の学会事業の8期目の初年度を終えることになる。運営の経験を蓄積したことを生かして、狩野裕会長、青嶋誠理事長を含む14名の理事と3名の監事、および各種委員会における委員により、各種事業を着実に実施した。科学研究費「国際情報発信強化(B)」により、*Japanese Journal of Statistics and Data Science* の発行と国際セッションの実施が強化され、昨年度に続き国際的な活動にも大きく貢献した年度であった。

2026年2月20日現在の会員の数は1,452(名誉会員12,正会員1,347,準会員5,学生会員88)、これに加えて賛助会員18法人、団体会員7団体がいる。

I. 出版編集事業

1. 和文誌の発行

和文誌2号[第55巻シリーズJ第1号(2025年9月)、第55巻シリーズJ第2号(2026年3月)]を発行した。内訳は原著論文3編、受賞者特別寄稿論文9編、特集論文5編、新会長特別寄稿論文、全426ページであった。

2. *Japanese Journal of Statistics and Data Science* 編集の支援

Japanese Journal of Statistics and Data Science 第8巻 (Issue 1, Issue 2: 原著論文40編、全1176ページ)の発行に協力した。また、科学研究費助成事業「研究成果公開促進費「国際情報発信強化(B)」の採択により資金面で貢献ができた(なお、本科研費は国際的活動資金としても利用されている)。

3. 会報の発行

No.203 (4月)、No.204 (7月)、No.205 (10月)、No.206 (1月) を発行した。

4. *JSS Research Series in Statistics* シリーズ(英文)の出版

昨年度に引き続き、*JSS Research Series in Statistics* シリーズの出版を行った。2025年度は1冊(2026年3月現在)が出版され、2025年度以前に出版されたものを含めると全43冊が出版済である。

II. 内外学界交流事業

1. 日本統計学会第93回大会の開催

2025年9月7日(日)～11日(木)、関西大学にて、遠隔でのリアルタイム参加も可能な形で、2025年度統計関連学会連合大会の一環として開催した。プレナリーセッションを行い、また企画セッションとして、日本統計学会会長講演、日本統計学会各賞受賞者講演(各賞授賞式)、JSS-KSS-CSA Joint Session, JSS-KSS-CIPS Joint Session for Young

Researchersを行った。

2. 春季集会の開催

2026年3月7日(土)に第20回春季集会が同志社大学にて、遠隔でのリアルタイム参加も可能な形で開催された。参加者は255名(現地参加:192名、オンライン参加:63名)であった。

3. 研究分科会の活動

以下の分科会が活動を行った。

「統計教育分科会」(深澤弘美主査:2010年12月発足、2027年3月終了予定)

「計量経済・計量ファイナンス分科会」(末石直也主査:2010年12月発足、2027年3月終了予定)

「女性統計家・データサイエンティスト育成分科会」(渡辺美智子主査:2019年4月発足、2027年3月終了予定)

「スポーツデータサイエンス分科会」(酒折文武主査:2021年6月発足、2029年5月終了予定)

「統計若手交流推進分科会」(小池祐太主査:2025年4月発足、2029年3月終了予定)

4. 国際会議への協力

2025年8月21日(木)～8月23日(土)、早稲田大学にて開催された8th International Conference on Econometrics and Statistics (EcoSta2025)においてJSS Keynote セッションの開催に協力した。

III. 会員関係事業

1. 賞の授与

学会活動の活性化促進のため、以下の賞を授与した。

第30回日本統計学会賞:南 美穂子、西山 慶彦、藤澤 洋徳

第5回日本統計学会中村隆英賞:川崎 茂、長岡 貞男、国友 直人

第21回日本統計学会統計活動賞:中間 栄治・岡田 昌史 (共同受賞)

第21回日本統計学会統計教育賞:独立行政法人統計センター、新井 仁

第19回日本統計学会研究業績賞:柳 真英、清水 泰隆

第18回日本統計学会出版賞:滋賀大学データサイエンス学部

『この1冊ですべてわかるデータサイエンスの基本』

鎌倉 裕成・共立出版 (共同受賞)

『統計学 One Point シリーズ』

第39回日本統計学会小川研究奨励賞:石原 卓弥、仲北 祥磨、

奥戸 道子、藤森 洸

2. 各種委員会の活動

社員総会(2025年6月7日)を開催した。

社員懇談会(2026年3月6日)を開催した。

理事会(2025年5月10日, 6月7日, 7月26日, 10月18日, 2026年2月8日)を開催した。

春季集会に関係する理事監事および委員で構成される春季集会準備会合(2025年11月22日)を開催した。

役員・代議員協議会(2025年9月5日)を開催した。

その他の各種委員会を適宜、開催した。

3. 広報活動の充実

メーリングリストの使用やウェブサイトの充実により、各種情報発信を促進した。

日本統計学会公式 YouTube チャンネルを通じて、2025年度統計関連学会連合大会の企画セッションとして実施された日本統計学会各賞受賞者講演(各賞授賞式)の模様を会員向けに配信した。また同チャンネルを通じて、第20回日本統計学会春季集会の企画セッションおよび特別講演の模様を会員向けに配信した。

4. 入会者の拡大

若手研究者の入会を促進した。

IV. 啓発普及事業

1. 「統計検定」の実施協力

日本統計学会が認定団体となっている「統計検定」が、紙媒体(2025年11月16日)およびCBTの両方で、一般財団法人統計質保証推進協会により実施された。

2. MOOC による統計学講座の提供

MOOC のプラットフォーム gacco において、「統計学 I : データ分析の基礎」、「統計学 II : 推測統計の方法」および「統計学 III : 多変量データ解析法」を開講した。

3. 統計教育関連事業の推進

2025年度統計関連学会連合大会にて「生成 AI 時代におけるデータサイエンス教育の展望」と題した企画セッションを実施した。

「第73回統計グラフ全国コンクール」を後援し、2025年10月2日に審査のうえ受賞者を決定し、賞状および副賞を授与した。

「第23回統計・データサイエンス教育の方法論ワークショップ」を2026年3月28日(土)～3月29日(日)に日本統計学会統計教育分科会、情報・システム研究機構統計数理研究所と共催した。本ワークショップ内で日本統計学会統計教育賞受賞者講演も行った。

「中高生・スपोर्टズデータ解析コンベンション2025-」を日本統計学会スポーツデータサイエンス分科会、同統計教育分科会と連携し、主催した。47チーム187名の参加があり、審査・授賞を行った。

2026年2月21日(土)～22日(日)に開催された「理数系教員統計・データサイエンス授業力向上研修集会(佐賀)」を共催した。

「JAPAN AI CUP 中高生 AI・DS 探求部門」に協賛として参画し、広報協力、審査

員の派遣、学会名を冠する賞の授与を行った。

そのほか、関連情報や関連のイベント等をメーリングリストやサイトを利用して告知し、理数系学会教育問題連絡会への参加、統計教育関連コンテンツの開発・公開を行った。

V. その他

1. 細谷賞の後援

東北大学大学院経済学研究科が創設した細谷賞を後援した。

第7回細谷賞：該当なし

2. 男女共同参画連絡会の正式加盟学協会への参画

2025年12月8日に行われた男女共同参画連絡会の定時総会と運営委員会において、日本統計学会がオブザーバー学協会から正式加盟学協会へ移行することが承認された。

貸借対照表		貸 方		貸 方	
科 目	科 目	期 末	期 末	期 末	期 末
資産の部	負債の部				
現金	未払金	34,641,039	0	1,183,284	
預金	未払金	34,641,039	0	1,183,284	
流動資産合計	負債合計				
60周年記念基金	指定正味財産	0	0	0	
IS財団基金	一般正味財産	1,030,813	168,786,574	165,614,604	
ICP基金	(うち基本財産への充当額)	29,981,640	0	0	
小川基金	(うち基本財産への充当額)	11,303,880	0	0	
中村隆英賞基金	(うち特定財産への充当額)	2,352,572	135,816,206	132,156,849	
特定資産合計		87,721,624			
固定資産合計	正味財産合計	132,156,849	168,786,574	165,614,604	
資産合計	負債及び正味財産合計	168,786,574	168,786,574	165,797,888	

(注) IS財団基金はISI東京大会記念事業基金
ICP基金はICPセミナーフォローアップ事業基金

監査報告書

私たち監事は、一般社団法人日本統計学会の 2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日まで
の理事の職務の執行を監査いたしました。その方法及び結果につき以下の通り報告いた
します。

監査の方法及びその内容

各監事は、理事と意思疎通を図り、情報の収集および監査の環境の整備に努めるとともに、
理事会その他重要な会議に出席し、理事及び使用人等からその職務の執行状況について報
告を受け、必要に応じて説明を求め、重要な決裁書類等を閲覧し、主要な事業所において業
務及び財産の状況を調査いたしました。以上の方法に基づき、当該事業年度に係る事業報告
にて検討いたしました。

さらに、当該事業年度に係る計算書類（正味財産増減計算書、貸借対照表）について検討
いたしました。

監査の結果

(1) 事業報告等の監査結果

- 一、事業報告及びその付属明細書は、法令及び定款に従い、学会の状況を正しく示している
ものと認めます。
- 二、理事の職務の執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事実
は認められません。

(2) 計算書類の監査結果

計算書類は、学会の財産及び損益の状況を全ての重要な点において適正に表示してい
るものと認めます。

2026 年 4 月 20 日

一般社団法人日本統計学会

監事

監事

監事

照 野 伸 孝
い い 崎 能 典
小 下 智 志

特定資産の増減及びその増減

特定資産の増減及びその増減は次のとおりである				(単位:円)	
科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	摘 要
60周年記念基金	62,680	50	62,730	0	増加額は預金利息、減少額は大会参加費等。
75周年記念基金	1,419,087	2,144	390,418	1,030,813	増加額は預金利息、減少額は学食費(臨時計)、振込手数料等。
ISI東京大会記念事業基金	30,023,695	52,410	214,465	29,861,640	増加額は預金利息、減少額は事務局業務委託費等。
ICPセミナーフォローアップ事業基金	11,284,163	19,697	0	11,303,860	増加額は預金利息。
小川基金	2,352,572	4,008	117,688	2,238,912	増加額は預金利息、減少額は謝状等。
中村隆英賞基金	90,074,009	155,794	3,108,179	87,721,624	増加額は預金利息、減少額は賞金、事務局業務委託費、振込手数料等。
合 計	135,816,206	234,103	3,893,460	132,156,849	

附属明細書

貸借対照表及び正味財産増減計算書の附属明細書は財務諸表の注記に記載している。

15. 博士論文・修士論文の紹介

最近の博士論文・修士論文を紹介いたします。

(1)氏名 (2)学位の名称 (3)取得大学 (4)論文題名 (5)主査または指導教員 (6)取得年月の順に掲載いたします。

修士論文

● (1)天野徳仁 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)日本における幸福度に影響を与える要因の分析 (5)笛田薫 (6)2026年3月

● (1)越智郁夫 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)営業日報データを活用した大規模言語モデルによる顧客案件の将来事象予測 (5)市川治 (6)2026年3月

● (1)榎木美咲 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)MRI画像への対照学習の適用による統合失調症患者の判別と特徴量抽出 (5)田中琢真 (6)2025年9月

● (1)秋本克規 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)多重代入法を用いた国内の長期縦断調査データにおける脱落の補正－各変数の分布及び回帰モデル推定値への影響の検証－ (5)奥村太一 (6)2026年3月

● (1)池野谷流向 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)Kolmogorov-Arnold Networksにおける焼きなましソフトマックス法を用いた数式探索手法の提案 (5)寺口俊介 (6)2026年3月

● (1)石崎寛子 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)琵琶湖周辺における風況特性と船舶事故との関係 (5)大塚道子 (6)2026年3月

● (1)泉紀行 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)預金口座情報を用いた法人企業間取引の重力モデルによる定量分析 (5)田中琢真 (6)2026年3月

● (1)岩知道大輔 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)ベイズ最適化による実験計画とシミュレーションモデルを連携した粉体製造にお

ける高生産性な粉碎条件の探索 (5)河本薫 (6)2026年3月

● (1)大下真之介 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)少量のアノテーション画像と基盤モデルによる藻場の推定 (5)飯山 将晃 (6)2026年3月

● (1)小野木夏樹 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)Equal-spli類似度行列を用いた非負値行列三因子分解による交通事故ホットスポット分析 (5)笛田薫 (6)2026年3月

● (1)蒲原和季 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)ノーリミット・テキサスホールデムにおけるフラッシュボードでのブロッカーが期待値に与える影響の分析 (5)藤井孝之 (6)2026年3月

● (1)川口陽子 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)スパース経時測定データに対するマルチレベル関数主成分分析と医療データへの応用 (5)松井秀俊 (6)2026年3月

● (1)岸田洋明 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)テレマーケティングの成否予測に対するwell-calibratedな機械学習モデルの開発 (5)今井貴史 (6)2026年3月

● (1)北嶋謙一 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)不確実な顧客需要の予測を目的とした混合ガンマ分布ベース深層分位点回帰モデルの開発と発注傾向クラスタリングへの応用 (5)今井貴史 (6)2026年3月

● (1)熊耳隼哉 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)情報幾何学を用いた継続学習の研究 (5)笛田薫 (6)2026年3月

● (1)後藤礼雄 (2)修士(データサイエンス) (3)滋賀大学 (4)授業グループワークの発話分析における応答誘発スコアの提案とその時間効力の分析 (5)市川治 (6)2026年3月

● (1)小林清晃 (2)修士(データサイエンス) (3)

滋賀大学 (4) ランダムMACに対応したWi-Fiプロブの紐づけによるスーパー内来店者動態分析 (5) 岩山幸治 (6) 2026年3月

● (1) 近藤航平 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 市区町村の流入流出データから都市政策を評価する：兵庫県内市町村の子ども医療費助成制度の実証分析 (5) 青木高明 (6) 2026年3月

● (1) 崎岡明日哉 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 交通ビッグデータにおける偏りの分析とその補正手法の提案 (5) 川井明 (6) 2026年3月

● (1) 神保和弥 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) データ駆動型アプローチによるMOSガスセンサーの設計開発—開発高速化のための特性解析と未知ガスに対する性能予測 (5) 江崎剛史 (6) 2026年3月

● (1) 関根真太郎 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 生成AIの社内利用における社員の利用意図を決定づける要因の把握 (5) 堀兼大朗 (6) 2026年3月

● (1) 関本 光一郎 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) オンライン変分逐次モンテカルロ法によるメルトスピニング装置の出湯径予測 (5) 今井貴史 (6) 2026年3月

● (1) 武田健生 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 小売百貨店催事が顧客購買に与える影響の因果分析 (5) 清水昌平 (6) 2026年3月

● (1) 武本理央 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 物価上昇局面における内的参照価格の更新メカニズムの時系列的変化に関する実証研究 (5) 河本薫 (6) 2026年3月

● (1) 田中裕也 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 鉄道事業におけるイベント需要変動を考慮した価格施策の因果効果推定と最適化 (5) 清水昌平 (6) 2026年3月

● (1) 辻開斗 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 外れ値にロバストな因果探索手法の提案と創薬データへの適用 (5) 清水昌平 (6) 2026年3月

● (1) 辻村和哉 (2) 修士 (データサイエンス) (3)

滋賀大学 (4) 血液透析患者での貧血治療薬投与に関する意思決定支援の研究 (5) 南條浩輝 (6) 2026年3月

● (1) 辻本健太郎 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 可変ドメイン関数データに対する関数回帰モデルの推定 (5) 松井秀俊 (6) 2026年3月

● (1) 天正寛人 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 職場環境が労働者のメンタルヘルスに与える影響 — 全国就業実態パネル調査を用いた実証分析 (5) 石川祐実 (6) 2026年3月

● (1) 中里遼太 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) Development of a Subtyping System for Breast Cancer Using Multimodal Medical Images (5) 村松千左子 (6) 2026年3月

● (1) 永住数馬 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 機械学習モデルによる経済波及効果の近似とその応用 (5) 佐藤健一 (6) 2026年3月

● (1) 新美善大 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 交通ビッグデータを用いた地理空間リスク予測モデルの提案と検証 (5) 川井明 (6) 2026年3月

● (1) 幡本翔 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 琵琶湖の風波特性に基づく波浪推算モデルの再現性評価 (5) 大塚道子 (6) 2026年3月

● (1) 平林芳 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 遺跡探査のための高精度地表情報による存在確率推定 (5) 青木高明 (6) 2026年3月

● (1) 福山翔太 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 気象-テキストアラインメントに基づく根拠付き気象データ解説文生成 (5) 飯山将晃 (6) 2026年3月

● (1) 藤田大悟 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 連続クリギングに対するスパース推定を用いた空間データ分析 (5) 松井秀俊 (6) 2026年3月

● (1) 細川知宏 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 非定常な需要変化に対する最適生産計画 (5) 来嶋秀治 (6) 2026年3月

● (1) 松浦和也 (2) 修士 (データサイエンス) (3)

滋賀大学 (4) 市民意識調査データを活用した地域愛着の規定要因に関する定量・定性分析－尼崎市の調査に基づく自治体の介入方策の示唆－ (5) 奥村太一 (6) 2026年 3 月

● (1) 松本和浩 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) テーマパークにおけるCBBEモデルに基づくロイヤルティ形成モデルの構築—webアンケート調査による実証研究— (5) 堀兼大朗 (6) 2026年 3 月

● (1) 宮下築 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) eラーニング講義教材における発話の間が学習者に与える影響に関する研究 (5) 南條浩輝 (6) 2026年 3 月

● (1) 村瀬亮多 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 動的時系列クラスタリングのための新たな動的混合線形ガウス状態空間モデルとパラメータのオンライン推定アルゴリズムの提案 (5) 河本薫 (6) 2026年 3 月

● (1) 森田翔太 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 落下型セルフレジのための商品識別方式の提案 (5) 義久智樹 (6) 2026年 3 月

● (1) 吉田智紀 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 高カードナビリティなカテゴリカル交絡変数を持つときの因果効果の推定方法－諸手法の前処理の有効性評価－ (5) PHAM THE THONG (6) 2026年 3 月

● (1) 吉田有輝 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) VisualSLAMを用いた移動カメラ映像からの運動物体の判定に関する研究 (5) 佐藤智和 (6) 2026年 3 月

● (1) 若園博 (2) 修士 (データサイエンス) (3) 滋賀大学 (4) 外来患者病院内滞在時間の機械学習を用いた段階的予測方式 (5) 義久智樹 (6) 2026年 3 月

● (1) 岩田修弥 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学大学院 (4) Anchored matching adjusted indirect comparisonの仮定が成立しないもとでの相対効果の推定値のestimandsとバイアス (5) 寒水孝司 (6) 2026年 3 月

● (1) 奥山輝人 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学

大学院 (4) Bayes流の群逐次デザインにおける第1種の過誤確率の解析的制御 (5) 寒水孝司 (6) 2026年 3 月

● (1) 高巢人碩 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学大学院 (4) レスポンダー解析における潜在的な確率分布と変数変換に基づく成功確率の信頼区間 (5) 寒水孝司 (6) 2026年 3 月

● (1) 田端瑠太 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学大学院 (4) 毒性と有効性を主要評価項目とするランダム化第2相試験における用量最適化のための試験デザイン (5) 寒水孝司 (6) 2026年 3 月

● (1) 山内一史 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学大学院 (4) がんの第1相用量探索試験における被験者内漸増デザインの被験者内相関の影響 (5) 寒水孝司 (6) 2026年 3 月

● (1) 飯田優希 (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学 (4) RKHS上のLocal Fréchet Regressionと多様体上のデータ解析への応用 (5) 白石博 (6) 2025年 9 月

● (1) 石山蓮 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) Neyman orthogonal scoreを用いたExtremal Random Forestsの中間分位点推定誤差に対するロバストな推定手法について (5) 白石博 (6) 2026年 3 月

● (1) 煤賀結斗 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) Quantile Regression Forestsによる分位点推定における変数選択手法の提案 (5) 白石博 (6) 2026年 3 月

● (1) 稲川舞織 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) Variogram-based Likelihood Scoreに基づくグラフ構造の導入によるNN-GLSの拡張 (5) 小林景 (6) 2025年 9 月

● (1) 川口駿 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) Dynamic Neural Collapseを用いたOpen Set Recognitionの発展 (5) 小林景 (6) 2026年 3 月

● (1) 張育翔 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) Gaussian Process Modeling of Baseball Pitch Trajectories with Signature Kernels (5) 小林景 (6) 2026年 3 月

● (1) 岡田和也 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) マルチクラス分類とマルチラベル分類に対するFスコアの統計的性質について (5) 林賢一 (6)

2026年3月

●(1)小林立青 (2)修士(工学)(3)慶應義塾大学
(4) γ ダイバージェンスに基づくロバストな確率的線形判別分析法について (5)林賢一 (6)2026年3月

●(1)西丸桜子 (2)修士(工学)(3)慶應義塾大学
(4)A covariate adjustment method for pAUC ratio in clinical trials with dropouts (5)林賢一 (6)2026年3月

博士論文

●(1)櫻谷正明 (2)博士(データサイエンス)(3)滋賀大学 (4)COVID-19パンデミック下における非COVID-19患者の臨床アウトカムと医療負荷・キャパシティ制限との関連 (Association of medical burden and capacity limitation with clinical outcomes among patients without COVID-19 during the pandemic) (5)杉本知之 (6)2026年3月

●(1)森西美光 (2)博士(データサイエンス)(3)滋賀大学 (4)未観測共通原因の存在下での因果探索アルゴリズムの研究 (5)清水昌平 (6)2026年3月

●(1)壁谷佳典 (2)博士(データサイエンス)(3)滋賀大学 (4)AI-based pathological image analysis of rare diseases (希少疾患におけるAI病理画像解析) (5)村松 千左子 (6)2026年3月

●(1)中川雄貴 (2)博士(工学)(3)東京理科大学大学院 (4)Estimation of mean and median survival times in settings with limited use of standard methods in cancer clinical studies (5)寒水孝司 (6)2026年3月

●(1)町田龍之介 (2)博士(工学)(3)東京理科大学大学院 (4)Refinement of statistical methods for predicting study duration in phase 3 cancer clinical trials (5)寒水孝司 (6)2026年3月

16. 新刊紹介

会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

題名: Improving Tests for Discrete Small Sample Data

著者名: 種市信裕, 関谷祐里

出版社: Springer

出版年月: 2026年5月

価格: 冊子体: 49.99ユーロ

内容紹介: サンプルサイズが小さいとき, 検定統計量の漸近分布を用いて検定をおこなうと, 正しい検定結果と逆の結論を導くリスクがある。本書は, 漸近展開の理論に基づき, 分割表等の離散モデルにおける検定の改良を提案する。

17. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2026年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上, こちらもご活用下さい。また, クレジットカードでの学会費払込も受け付けております。お

申込みは学会ホームページよりお願いいたします。(https://www.jss.gr.jp/fec/)。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに, 氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F
公益財団法人統計情報研究開発センター内
日本統計学会担当
Tel & Fax : 03-3234-7738
E-mail : shom@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

新沢 雄一 会員

入会承認

上村真一、岡達志、岡原久也、岡村和樹、小川創、川戸健太竜、葛本大志、木幡三津久、小林岳斗、近藤大介、佐々木景友、徐春曦、高尾永太、高橋孝成、徳田悟、鳥越規央、仲真弓、鳴海孝之、早木達史、深澤武志、藤井佑実子、藤田秋仁、増田雄亮、三原千尋、山崎真照、DANG PHUNG XUAN (敬称略)

退会承認

秋山英久、浅野美代子、池森俊文、稲葉昭英、上藤一郎、大貫裕二、岡太彬訓、岡田清伸、小高哲

也、菊池宏和、木原泰斗、熊澤貴雄、小島要、作原友樹、佐々木万亀夫、佐藤旭、佐野文哉、田村義保、中野貴博、中山優吾、早見均、松井知己、松尾精彦、森川耕輔、森田築雄、矢野智也、山田剛久、若松孝明、朝日新聞社世論調査部、岐阜県環境エネルギー生活部統計課、(株)スキルアップ NeXt (敬称略)

長期連絡不能により退会したとみなされた会員

荒木崇、大島悠、加藤賢悟、河原一幾、菅野雄太、岸村遼、小松慧、酒井玲美、清水浩二、鈴木進之介、陳景輝、辻和真、土居政之、成田淳司、長谷川貴大、松原望、三尾育摩、山田知美、吉田総太、SHERIDAN PAUL (敬称略)

現在の会員数 (2026年5月11日)

名誉会員	12名
正会員	1,323名
準会員	5名
学生会員	58名
総計	1,398名
賛助会員	16法人
団体会員	6団体

18. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

- 来日統計学者の紹介
訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。
- 博士論文・修士論文の紹介
(1)氏名 (2)学位の名称 (3)取得大学 (4)論文題名 (5)主査または指導教員 (6)取得年月をお知らせください。
- 求人案内 (教員公募など)
- 研究集會案内

- 新刊紹介
著者名、書名、出版社、税込価格、出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし、主観的な表現は避けてください。
- 会員活動紹介 (叙勲・受章、各種受賞等)
できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル (テキスト形式) の送付をお願い致します。

原稿送付先：

〒102-0071
東京都千代田区富士見1丁目11番2号

東京理科大学経営学部経営学科内

朝日 弓未 宛

E-mail: koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用 e-mail アドレス)

- 統計学会ホームページ URL :
<https://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL :
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL:
<https://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス :
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス :
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス :
shom@jss.gr.jp